
精霊王転変

笹野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊王転変

【Nコード】

N4682X

【作者名】

笹野

【あらすじ】

不覚にも人に囚われた精霊王はそのまま封印され、そこから流れ出す膨大なエネルギーを利用されるだけの存在となってしまう。それから100年後、平和と繁栄の象徴となったキリーク王国から物語は始まる。

プロローグ1（前書き）

学生の頃ノートの端に連載(?)していた落書きを読みやすいように書き直して投稿してみました。

プロローグ1

キリーク王国。

初代王ヴァーウエンはエルという精霊王を城の塔に閉じ込める事に成功し、エルから流れ出る膨大なエネルギーを背景に機械文明を発展させた。

エル捕縛から100年。

第4代キリーク王ヴァレリオ王と隣国アルシュ王国の第一王女ソフィアの結婚式が首都ルーパスで盛大に行われ、それから1年目にして彼女は待望の第一子を身籠った。

全てが満たされた日々が続く…だが在る日。

空がどこまでも青く澄みわたり雲ひとつ無い晴天の日、王妃ソフィアはなぜか中央塔が気になってしかたがない・・・

「貴方に不自由をさせることは無いと思う。何か欲しい物があれば遠慮なく言いなさい。

手続きさえ踏めばこの国の何所に行くのも自由だ。ただ・・・中央塔にだけは近づいてはいけないよ。」

結婚の儀式が全て済んだ時に王から言われた言葉。

王妃ソフィアは結婚してからその言葉を忠実に守ってきた。

やさしい夫、広大な宮殿、礼節と秩序の満ちた国。

そして高度なテクノロジーと行き届いたユーティリティ。

例えば衣装部屋にある小さな洗面台。

そんな所でさえ蛇口をひねれば無色透明な温水が流れ出す。

これは宮殿だけでなく庶民の家でも使われている設備だ。

生まれ故郷のアルシュ王国はキリークからの恩恵を受け産業も発展

しインフラ整備も整っている。
が、常時温水が使えるような設備を設置する余裕はまだない。

窓の外を見あげると中央塔が青い空に向かってそびえ立つ。
そしてその先には壮大で美しく銀色に輝く楕円体、通称”ユリカゴ”。

それは4本の鉄塔に支えられ地上から1km上空に在る。
今日はなぜかその塔から目が離せない・・・

いったいあそこに何が？皆のうわさではあそこには初代ヴァーウエ
ン王が手に入れたこの世を制覇できるほど協力的な精霊が封印されて
いるとか。

精霊？それは私の故郷でさえ童話の中や昔ながらの精神世界で語ら
れるだけの空想の存在。

この国には科学があり技術がある。それなのに精霊ですって？
でも100年前まではこの国もアルシュ王国と同じ・・・いいえ、
それ以下のただの集落だったのに何故？
あの塔には100年でこんなに国を変えてしまう何かがある。

知りたい・・・！

だめ・・・あそこに入っではいけない！

でも私は王妃じゃない？あと3ヶ月もすれば子供も生まれるわ。
私はもうこの王室とひとつなのにな。
その私が何も知らされない。

そうよ。

王が知っているものをなぜ私は知らされないの？

それは・・・おかしい！

王妃は王に塔へ入らせてくれとせまるが王は相手にせず、王妃付きの近衛兵に「王妃を」塔への廊下”に入らせるな」と、ユリカゴ”への通路に踏み込ませないよう命じた。

それでも尚、王妃は「なぜなの？」と問い、王は「昔からの決まりだ。王以外入る事は許さん。知る必要も無い！」と、不毛な会話のループが続く。

ついに王はそのしつこさに激昂し、王妃を塔の見えない北の居室に閉じ込めた。

空は澄み、新月がくつきりと闇の中で細いカーブを描いている。

夜更けにもかかわらず王妃は窓辺から離れずにいた。

やがて・・・新月が中天にさしかかろうという頃、王妃は静かに廊下への扉へと歩き出した。

廊下は真昼のごとく明るく、王妃は扉が開くと一瞬目を伏せた。

3人の近衛兵が立っている。

2人は扉を背に。

1人は扉に向かって。

だが、彼らはピクリとも動かない。

王妃は風のニンフのように軽やかに彼等の間を通り抜けて廊下に出るとやがて城の奥へと消えていった。

城の廊下は一部は暗いものの主要部は全て電化され、煌々と照明に照らされている。

その中を一人、ナイトドレスに羽織った絹のガウンをなびかせなが

ら歩き続ける王妃。

だが、誰も王妃を止める者はいなかった。それどころか、すれちがっても会釈さえしない。

まるでそこに王妃が居ないかのように……

北の居室からしばらく入り組んだ宮殿の中を歩き南の渡り廊下から王の寝室に辿り着いたソフィア。

そこに立つ屈強な近衛兵の横をすんなり抜けて扉を開けた。

中は全ての明かりが消えて闇一色。

その中を王妃は音もなく歩いてゆく。

ベッドで眠る王に気を使う様子も無く寝室のまだ向こう側にある小部屋に吸いこまれる。

壁に組み込まれた暖炉の横になにやらボタンが規則正しく並んで美しい幾何学模様を描いていた。

王妃は慣れた手つきで4つの文字を同時に押した。

カチリッ

壁の一部がスツと左右に開く。

そこにあつた封筒とキーを手に取ると、王妃は静かに王の部屋をあとにした。

再び南の渡り廊下を宮殿へと戻ってゆく。

王妃は、スフの花が咲き乱れる中庭を横切り塔への廊下に至る警護者用予備通路に入った。

突き当たりの扉にはやはり幾何学模様の中に組み込まれたボタンがあつたが、王妃は難なく7つのボタンを押し扉を開けた。

塔への廊下は、曲線が入り組んだ美しい柱が24本、左右に対となり天井を支えている。

天井にはやはり照明が組み込まれ、淡く白い光を放ちエレベーターに続く赤い絨毯を照らしていた。

王妃ソフィアの白い影が赤い絨毯の上をゆっくりと歩いてゆく。

その絨毯が導く先には”ユリカゴ”へ向かうエレベーターがあった。そしてその入り口には守護天使の石像が2体で立ちふさがっている。ソフィアは王の部屋から持ってきた封筒から2つのカードを取り出し石像の顔に向かってかざした。

キュキュ・・・キュ・・・キュキュ・・・金属のこすれる音が床下から響く。

そして守護天使が静かに扉を開けた。

誰もが深く安らかに眠り警護の者だけが目を光らせていたいつもと変わらぬこの日。

地上から一つのカプセルが静かに、そしてゆっくりと上空へと上っていった。

プロローグ1（後書き）

プロローグが一つに収まりきれませんでした。長々しくてすみませ
ん。

プロローグ 2

新月は中天より傾き、東の空はほんのり明るい。

塔のエレベーターは徐々に高さを増してゆき王妃はその窓から遠くの地平線を静かに眺めていた。

やがて、エレベーターが止まり、ついた先はエネルギー源隔離施設” ユリカゴ”

エレベーターから一步踏み出すと、ゆるいカーブを描いた廊下に出た。

廊下に沿って入り口に何かの装置がついたドアが並び、そのドアの小窓から機械類が立ち並んでいるのが見える。

全て自動制御されているのか人つ子一人いない。

廊下をぐるりと周ると、鋼鉄の扉がいきなり目の前をふさいだ。

手の中にある鍵をおもむろにその扉の横の穴に指し軽く回すと、カコンという小気味良い音がして扉が開いた。

そこは広いフロアにやはり制御装置なのか、おびただしい数のボタンとスライドバーと液晶画面が連なっていた。

そしてフロア奥には幅広い螺旋階段がある。

誰もいないフロアを突っ切り螺旋階段を上へ進んでゆく王女。

そしてついに辿り着いた黒と黄のドアに手をかけると思い切り左右に開けて中へと入っていった。

部屋の中は10?ほど。四方の壁・床・そして天井も特殊な石が使われているようで、踏んだり触ったりすると少しくぼみ、離れるとそこは元に戻った。

そんな部屋の中央部に直径5mほどの円形の台があった。

その縁から上部にかけて霧のようなものが絶え間なく放出されてい

る。

『きれい・・・』

なぜか王妃はそう思う。

薄暗い部屋の中、そこはまるで海を切り取ったように青い光がゆらめいている。

そしてその中央。

そこには空中に浮かぶこぶし大の黒い石とそれを上下でおさえつけているような直径15cm程の皿状の何かがあった。

これが封印されている精霊？

こんな石ころが？

王ったらこんなものを私から隠していたの・・・？

王妃は円形のシールドをひとまわりして、ある場所から静かに円形の台の上に乗った。

何も起こらない。

ちよつとにじり寄って中央の皿に近づく。

ゆっくり観察してみると、石はただ黒いだけではないようだ。

シールドの光なのか自ら発光しているのか、黒い石の表面がキラリと青を放つ。

きれい・・・

王妃は手を差し伸べ

バリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリ

バリバリバリバリバリ

バリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリ

バリバリバリバリバリ

突然の放電が王女を襲った

暗い・・・

照明が切れたの？・・・

ああ、何だか身体がだるい・・・

ユリカゴの中心部に”聖源室”と呼ばれている場所がある。

その入り口は厚い扉が二重に重なり黒と黄のまだら模様をつくりあげ、ある場所を押さえないと開かない構造になっていた。

それを知る者は少なく、ましてやその中に入る権限を持つ者は尚少ない。

そして今、4人の男達がその部屋の中で話し込んでいる。

研 a 「誰も気が付かなかったのです。」

研 b 「ええ。我々はこのフロアですと仕事をしていたので気づかないはずがないのですが・・・」

王 「エル力が漏れていたのか？」

研 a 「そうとしか考えられません。」

医 「気が付かれました。」

医者の声に振り向いた王はシールドぎりぎりまで近づいて、中で横すわりのまま俯いている王妃を心配そうに見た。

王 「大丈夫か？」

この声はヴァレリオ？・・・ああ・・・

王妃 「ごめんなさい。」

王 「・・・」

王妃 「私…どうかしていません・・・もう2度とこんな事しませ

ん。許して……くだ……さい」

僕げに体を崩し泣く王妃を見かねて王が研究所員に詰め寄る。

王「おい。彼女の中に本当にエルが入ってしまったのか？」

研a「ええ。間違いありません。残念ですが御子はすでにエルに乗り移られております。」

なんと……！

もうすぐ我手に抱けると信じていたわが子に？

手で撫でればそこに命があると判るほど成長していたわが子……！！

王「ソフィア…君をそこから出すわけにはいかなかったようだ。」

王妃「ああ……王……どうすればその怒りを静められるのでしょうか？」

王「出産したら出られるさ。」

研a「王、それは難しいです。」

ヴァレリオ王は憂いの顔に怒りをたたえ研究員を睨んだ。

王「何故だ!？」

相手が王と言えども学術的事実にのみ忠実な研究員はひるまない。

研a「エルに触れればその影響は絶対です。お妃様はエルと胎盤で繋がった存在です。」

たとえ出産して御子と離れたとしてもここから王妃だけを出すと同時にエルも脱出する可能性は大きいです。」

わかつている……精霊王エル喪失。それだけは絶対に許されない。

王「……………ソフィア。残念だ。」

王妃「王!!! 助けて! 私をここから出して下さい! 王……!!」

絶句し苦悩の表情を浮かべ王妃を見つめ続けるヴァレリオだったが

政道を見失う事はなかった。

妻と子を飲み込んだシールドにきびすを返し、王はその場を立ち去った。

プロローグ2（後書き）

長いプロローグ終わりました

第一章

ソフィア王妃がエルにより聖源室まで辿り着きシールド内に入ってから全てのエネルギー供給が止まった。

国内はもちろん電力供給していた近隣諸国も騒然となったものの、結局5分もしないうちに予備電力が働き50%の地域が復旧した。ユリカゴ内はエルからのエネルギーを使用しない構造になっているのでシールド消失も免れ予備電力への切り替えもスムーズに行われたのだ。

エルはシールドまで王妃を呼び寄せたものの、結局彼女の中の御子に閉じ込められ逃げることはできなかったのだ。

円形高圧場の一部：彼女が入り込んだ場所に脆弱性を発見した研究員はさつそくそこを改良し、3重構造にすることで内外の接触を遮断、王妃に食事を差し入れる事に成功した。

シールド内で生きていくだけの最低限度の用意を・・・とはいえ。そもそも、なぜ普通より60気圧も高いシールド内で王妃が生きていられるのか。シールドの境目から15cm中までは高温蒸気で包まれているのになぜ無傷でそこを通り抜けられたのか・・・謎には答えを。

シールド研究と平行して人体研究も行われたがそれも長くは続かなかった。

予定より3週間も早い御子誕生とともに彼女は出産時にショック状態に陥りそのまま亡くなってしまふ。

シールドの中の王妃の遺体は3日もしないうちにミイラ化してしまつた。

そしてその横には・・・

出産の時に同時に出てきた胎盤はしだいに血脈を広げ、そのあいまに皮膚状の膜が出来て優しい丸みを帯びまるでチューリップの花の様相。

その膜のむこうに安らかに眠る嬰兒の姿が見える。

エルだ。

検査の結果、出産時にひどく低下したエネルギー放出量も3日後には安定し、シールド内は一カ月間測定し続けて安定が確認された。

さて、彼女の死体はその間に縮み続け最終的には50cm程の丸太炭のようになってしまった。

国王は出来るならば王妃を土に埋めたいと思い、研究員はシールド内に異物がある事に不満を持っていたので、彼女の死体を絶対安全に取り出すプロジェクトは難なく立ち上げられ、試行錯誤とシミュレーションを繰り返して1年後ついに王妃は地上に戻ったのだった。

だが、王妃の為に特殊素材をコーティングされた石棺が地中に納まり祈りが捧げられたその時、王をはじめ全ての参列者が地中から蒸気の立ち上るのを見た。

何も知らない者はただの錯覚か朝霧の名残かと思うほどのわずかな蒸気。

だが、聖源室を知っているヴァレリオ王にはそれで十分だった。

多分エルの残滓に違いないと国王は全世界にその跡を追うべく調査団を送り出す。

第二章

キリーク王国辺境の地、ノサツポ。

「村長！一本杉の道から5人、見かけない奴らが来てる。変なりヤカー引いてるぞ。」

「ああ、中央から来た調査団の旦那方だろう。やっと来たか。」

「やっとつて？」

「この村にもようやく舗装道路が出来るんだ。」

「え？道路？」

「そうだ、すごいだろう！山向こうまでは来てただけだよつやくこつちまで来るそうだ。」

「へええ」

一方、調査団の一行には静かなどよめきが起こっていた。

電動キャリアに搭載した計器を囲み、興奮ぎみに話をしている。

「これは間違いない。」

「ここからじゃ見えないな。」

「この丘の向こうだ。距離は3km程か。」

「俺が行ってみようか？」

「焦るな。まだ時間はある。」

「ああ。」

ちよつどその頃。

丘のむこうではロバに乗った10歳ほどの少年が坂を上がりきったところだった。

彼は村の外柵を入ると一番北にある離れの小屋に向かった。

そこが彼の生活の場。もつと言えば古い師デーの家だった。

デーは高齢ですでに足が萎え、家から出られなかった。が、口だけは達者である。

「遅いじゃないか！ナーノ！どこほつつき歩いてたんだい」

「別に」

「腹が減って死にそうだよ。早くめしの用意をしなよ！」

「ああ」

「まったく…ちよつとばかり知恵がついたと勝手にサボることばかり考えて」

フー…

毎日同じ小言を聞かされるのも疲れる。

調査団が到着するとその夜は歓迎会が開かれ、次の日はさっそく彼らは持ってきた計器で何かを計測していた。

その夜、村長と見慣れない男がデイーの家を訪れた。

「わたしはキリークの調査団に同行しているアルガスと申します。」

「調査団の人じゃないのか。何の用だ？」

「キリーク王国の人権擁護に関するパンフレットをまずどうぞ。」

デイーの前に立派な印刷の冊子が置かれる。

デイーの顔がひきつるのを無視してそのまま話を続けるアルガス。

「あなたの所にいるナーノという子供の事ですが…彼を我々の所に預からせていただきたいのです。」

「は？」

「あの子には首都ルーパースできちんとした教育を受けさせてあげたいのですが。」

「は！教育？何言ってるんだい。ここにいたって教えることあキツチリ教えてるよ！出てっくれ。私があの子の親だ。あの子を育てるのは私だ。手放すもんか！」

「あの子の本当の親では」

「私はあの子が生まれたときから面倒を見ているんだ！私の面倒を見るのがあたりまえだろ！あのがいなくなったら足萎えの私アど
うすればいいのさ!？」

「ごもつともですね…では、あなたも同行しますか？」
「へ？」

デューは怒り顔のまま口元だけがヒクリと動いた。
予想外の展開に固まっている。

「あなたもルーパースへご招待します。あちらの病院へ行けばその足も元に戻りますよ。もちろん現金は渡せませんが宿と食事はわたし達の施設でどうぞ。それにあなたの歳でしたら病院代は無料ですしね。」

「ほ、本当か？」

思案するデューの顔はこころなしに微笑んでいる。

ここで今まで無言だった村長が苦い顔で割り込んできた。

「アルガスさん。話が違うよお」

「村長。あのがいなくなればこの方を世話する人を探さねばならないでしょう。わたしが引き受けた方がいいんじゃないですか？」

「う・ん、だが、デュー様はそもそも祈とう師なんだ。彼がいなくなったら神を祭る者がいなくなる」

「足が良くなればすぐにでもこちらに帰します。」

「そうか。で、どのくらいで治るもんなんだ？」

「それは、医者に見せなければ何とも…検査の結果はすぐにお知らせします。」

アルガスは口調も人当たりも穏やかなまま村長に言った。

が、村長は何かひつかかるのだ…が、中央の人間にあまり難癖つけてると思われるのも困る。

昨日の歓迎会では、舗装道路が村まで通され車が往来するようになればこの村がどれだけ発展するか教えられて、村人も乗り気になっ

ているのにミソを付けたくはない。

デューはもはや足が治り自分で出歩けるバラ色の未来しか見えていないようだ。

「いつループスに行けるんだ？」

「調査団が帰るのと一緒です。」

「いつだ！」イラつくデュー。

「2日後を考えています」

「よし用意しよう。」

奥でこの話を聞いていたナーノは喜びに震えた。

こっそりと家を出ると丘に向かって走った。

「ループス？ループス！ここから出られる！もうあいつの面倒を見なくてもいいんだ！」

第二章（後書き）

ちょっと話に無理があったので修正しました（10/13）

第三章

それから2日後、朝日が昇り朝霧が晴れたところで調査団一行と占
い師デイーとナーノは村のはずれにある一本杉を背に首都ルーパス
へと向かった。

そこから4時間ほど歩いた所に8人乗りの電動自動車が置いてある
という。

「ここで待つか。」

先頭を歩くアルガスが誰かと交信していた手をおろし後ろを振りか
えった。

後に続く4人と2人は細い路の中にあちこち浮き出ている太い木の
根に腰を下ろす。

道に沿って川が流れているらしい。

鬱蒼とした下草で見えないが流れの音が聞えてくる。

水筒の水を飲み一息ついて汗を拭く。

時折風が吹きぬけ火照った肌を冷やした。

・・・どこかで鳥の鳴き声がする。

ナーノはその聞いた事のない鳴き声を追って立ち上がった。

それは無意識だったのだが。

その一瞬後、金属音と肉を切り裂く音が背後で聞こえ、振り向く前
に何かが倒れる音がした。

デイーが倒れた音だと悟って危険を察知し、そのまま森の奥へと駆
け込もうとしたナーノだったがすぐに捕らえられ、5人とそれに加
わった大刀を持つ男2人に囲まれた。

「苦しみたくなきゃあばれるな」

「騙したな…あんた達…なんで？」

震える声で訴えるも肩と腕をおさえこまれひざまずくナーノ。

「これで終わりだ」

男が持つ刀が不思議な虹彩を放ち、ナーノの首めがけて振る落とされた。

が、

男の身体が一瞬ひかり、そのまま黒焦げになって倒れる。

「ガス！」

「早くやれ！」

すぐにもう一人がナーノの頭に大刀を突き下ろそうとしたが、突然吹き付けた風の壁に巻き上げられ大木の幹に叩きつけられた。

ナーノを押さえていた男はそうなるのを見越してか、いつの間にかナイフを振り上げナーノの首に突き立て…たはずだったのに、それはかなわなかった。

男が立っていた地面がいきなりなめに割れ、そこから電光が走ったのだ。

地から走り出た稲妻はそこに立つ男達全てを餌食にした。

ナーノを後ろで押さえていた男も一度踊るように飛び上がりそのまま倒れた。

稲妻はそのまま消失することなくナーノの身体の周りを縦横無尽に走り回っている…まるで主人にまとわりつく犬のように。

ナーノ自身もほんわかとした心地よさを感じるだけだった。声がした。

男とも女ともつかない声…

『我々はあなたのしもべ。あなたは我々のしもべ。共に生き、共に死す。』

『誰？…誰だ！？』

『我々には名がない。あなたもそうであるように…』声はか細くな

り消えた。

それと共にナーノは意識も朦朧として身体力が抜けてしまい膝をつき天を仰いだ。

地が割れその中に落ちて行きながらはるか上空に見える空の青がナーノを安らかな気分させ・・・意識は途絶えた。

第三章（後書き）

おおお・・・思ったよりいっぱい読んでくれる人がいる！
嬉しいものです。ありがたや（-人-）

第四章

シャルル溪谷。

その上流の川原に2人の男の影。

「バスコー！めしだぞー！ー！」

「やっとか・・・腹がねじ切れそうだ。どれ。」

バスコーと呼ばれた男はさっそく渡された皿の中のものにかぶりつく。

「・・・どう？」

「どうって？うまいよ。」

渡した男は自分の皿をスプーンでかき混ぜながらバスコーの様子を眺めていた。

バスコーはおいしそうに食べている。

ふむ？

「・・・そうか。良かった。」

「あ、もしや、テメー！俺を毒見に使ったな！？」

「考えすぎだよ。バスコー。」

「いや、おまえはそーゆー奴だ！」

「人聞きの悪い」

川原で、名もない雑草といやに色が鮮やかな川魚の煮込みを食べる

男2人。

川のせせらぎ。

森の木々が風にそよぎサワサワとやさしい音が止まらない。

が、

川の上流から変わった鳴き声が聞こえる。鳥の声？・・・いや猿の声。

「なんだろうね。バスコー。」

「さあね。」

「行ってみてきてくれよ。」

「何で俺が？」

「お前の方が目が効くからさ。近くに行く必要がない。お前の目は鷹より鋭いしね。」

「うまいこと言って…」

しょうがないとバスコーはしぶしぶ立ち上がり、上流へ歩を進めることしばし。少し川幅が広くなり、ところどころで巨大な岩が水面に顔を出している。

その一つ、川のだ真ん中で鋭く突き出た岩の上に小猿が一匹座っていた。

しきりに鳥のような声で吼えまくっている。

「ふふーん・・・逃げられなくなったわけか。へっ明日の朝食だ。」

バスコーはナイフを取りしやすい位置に締め直し、小猿に向かって川に入った。

だが、バスコーが岩に手がかかると一瞬前に小猿はみごとな跳躍を見せ、一っ飛びで岸に降り立ち逃げていってしまった。

「なんだまったく・・・ありゃ!？」

岩の影に人が半身乗り上げるようにひっかかっていた。

ナーノだった。

バスコーはナーノをかついでもう一人の相棒、ハリーのもとに帰ってきた。

ハリーはすぐさま焚き火を強くし、ナーノの様子を観察する。

どこにも傷がなく、水も飲んでなさそうだ。
何故こんなところに子供がいるのかという疑問はまず置いて、
着ている服を脱がせ簡易乾燥機に突っ込み、毛布にくるんで横にし
た。

「小猿が知らせるなんて、確か聖書にそういう話載ってたよな。」
「聖人を助ける小動物の話なんざ、古今東西どこにでもある民話だ
がね。」

「聖人には見えないぞ。」

「そうそういないだろ。聖人。」

「上流の方に人家があるんだろうか。」

「どうだろう…この服装は旅仕様だから多分道に迷って川に落ちた
んだろうな。」

「つまらん。」

「つまつたら困る。」

「いっそつまれよ。」

「つまつたら面倒だろ。」

「スッポン！」

「やめろwww」

2人が言葉遊びでじゃれているところでナーノの目が覚めた。

第五章

バスコーとハリーはナーノに何者か訊いたが要領を得ず、結局名前とノサツポが故郷と言う事だけ聞き出し満足することにした。

どうせ里に降りれば警察に渡してさよならする間柄だ。

ナーノに煮込みの残りをあげて、自分たちはこの森に住むコザガラを探していると話し出した。

「コザガラ？」

「そう。コザガラ」

「あれは伝説じゃないんだよ」

「そうそう。実はいるのさこの森のどこかに。」

もくもくと食べるナーノ。

「疑っているね。どうせ俺たちはロマンチストさ。」

「あの……コザガラって何？」

「へ？」

「は？」

「知らないの？」

「知らない。」

2人はナーノに向かいにつこり笑った。その笑みはもう少しで高笑いに変わる寸前、なんとか押さえているようなひきつりにも似たものだった。

「コザガラは聖骸靈録という本に載っている逸話に出てくる仙人なんだ。童話に『とんがり山の仙人』というのがあろう？それに出てくるコザ爺さんというのはコザガラの事なんだよ？」

「ふーん」

知らないと言うとまた話が脱線するので相槌を打つナーノ。

「コザガラは1000m先の話を聞き、暗闇を飛ぶ蝙蝠のはばたきを数え、霧に姿を変え山を駆け下り、風となつて天に上昇すると言われているんだ。」

「その姿は百を超える老人だと伝えられている」

「コザガラは一種の自然生命体だね。この星自体を一つの意味を持つ超自然生命体と考える説は知っているかい？」

「ううん」知るわけがない。

「この星の営みのすべては偶然や法則なんかの出来事ではなくある意思によって行われている。雨も風も雲も大地の恵みも何もかも」

「そして、この石ころ一つ一つにも意思が宿っている。」

バスコーが手元の小さな石を拾つてかかげる。

そしてまるで宝石を扱うがごとく静かに胸に抱くのをみてナーノはちよつと引いた。

「コザガラは仙人と言われているが精霊だろう。この山に宿る精霊に違いないと思うんだ」

「精霊？」

「山というのは、いろいろな生命体の結晶なのさ。土も石も木もそこにすむ動物たちもね。それら全ての総合生命体というところかな。」

「精霊・・・王」

「おや、精霊王を知っているのか？」

「精霊王に関してはタブーが多くてね。もちろんキリークではその言葉を口にしただけで警察が飛んでくる」

「そうさ。精霊まではOK。それに王とか、いわんやエルとかきた日にああ・・・」

「あぶねえ！あぶねえぞバスコー。今君は何と言った!？」

「は！精霊と王とエルであります。」

「続けて言ってみる！」

「それは・・・ごかんべんを」

「言え！」

「はっ！精霊王エルであります！」

「よく言った！おまえに10年の服役を言いわたす！」

「つてなもんさ」

おちゃらけていた2人はナーノの変化に気がつかない。

「精霊王エル」

「だから言っちゃだめだつて」

ナーノの顔色は蒼白。ゆるりと立ち上がり天に向かい叫んだ。

「精霊王エル！！」

その時地面がゆれた。

「うわっ地震だ！」

「川がやばい！」

「地割れか！？」

すぐさま荷物を手に持ち川べりから離れようとする2人。

ナーノは未だ焚き火のそばに立ち川を分断する地割れに向かい大きな声で呼んだ。

「コザガーラン！！」

地割れに川の水が怒涛のように流れ込みぶつかり合いしぶきを飛ばし、霧を生んだ。

やがてその霧は一つの形を作り出してゆく。

「コザガラだ！」

「写真取れ！早くバスコー！」

「わーつてる！」

2人がわたわた荷物解いている間にその像は老人の形となりナーノのそばに歩み寄る。

「王・・・よくおいでくださいました。」

ナーノは霧の老人を見つめた。その目は深い闇に覆われ底がない。

そこにいるのは精霊王エルの意思を伝えるただの中継道具。

「全ては変わる。だがそれは螺旋を描く」

「上にでしょうか？」

「そうだ。だから希望を持つのだ」

「王よ……」

「この子を助けよ」

「この人間の子を？……では」

「この子の運命は我に到る。そしてもう一人……たのむ……」

「わかりました。」

一陣の風が通り抜けた。

老人の姿は一瞬にしてくずれ霧が晴れてゆく。

バスコーとハリーはシャッターが下りないカメラを必死にいじくりまわしていたが被写体がいなくなりケンカをはじめた。

ナーノはただ一人取り残され、川を見つめている。

川を裂いた地割れはびたりと閉ざされ、まるで何も無かったように鳥がさえずる。

と、視界の端に鮮やかな青を見たような気がして川下に目を移すと、そこには女性が一人立っていた。

歳は20歳前後ぐらいか……だが、ナーノは何の疑問も無くつぶやいた。

「母さん」

女性はキリーク王国の隣国アルシュ王国から嫁ぎ、非業の死を遂げたソフィア王妃その人だった。

「出たー！ー！ー！」

「ゆ、ッ幽霊」

「！！」

「まさか、似てるだけだ。似てるだけっ！きつとアルシュ人なんだ」

「そ、そうだよな。俺も写真でしか知らないし。」
パニックを起こした2人だったが女性は幽霊でも他人の空似でもなくソフィアの記憶を持ったソフィア本人だった。

第六章

ソフィアはバスコーとハリーに自分の生まれ故郷アルシュ王国につれて行ってくれるように懇願した。
アルシュ王に会うために。

でこぼこの山道を徒歩で下りふもとに着くと、そこからは電気自動車で一路アルシュ王国に向かうことになった。

キリークとアルシュの王室がつながった事により国境の警備は人から自動登録機になっていた。ゲート内を通ると車体番号と運転手の映像が公安国境局に自動登録される仕組みである。

高速道路は一本のみ。

キリークの首都ルーパスからアルシュの首都メイシャルンまで続いている。

高速の途中にある休憩所にはみやげもの屋はもちろん、アルシュ国のご案内や換金所まで設けられていて全て用意万端整えることが出来た。

パシヤツ

後部座席にはソフィア王妃とナーノが寄り添いながら眠っている。

ハリーはその微笑ましいながめを写真に収めた。

こうして見ると2人は確かに血が繋がっている。

年齢から姉弟にしか見えないが確かに血が繋がっているのを実感する。

「あと1時間で着くと思う。」

「アルシュに来る予定は無かったからなあ。バスコー、アルシュに来たことあるかい？」

「ないね。」

「そっけないな。」

「俺、運転中だから話しかけないで。」

「何を今更。じゃじゃじゃ俺歌でも歌おうかな。」

「やめる。2人が起きる。」

ハリーは後ろの座席を覗き込み・・・そのまま10分は固まったままだった。

「・・・美人だなあソフィア様。ああ信じられないよ
俺、ソフィア様の御手を取って道を歩いて来たんだぜ？なんだか
俺の手がグレードアップした気がする！」

「というか、ソフィア様の御手が穢れたんじゃねーの？」

「テメー・・・このやる！」

「いででつつつやめるよ！あぶないだろ！！！」

高速を降りて街中をしばらく走るとやがて石壁が見えてきた。

と、言っても高さにして2mほどしかなく、大人ならば簡単に乗り
越えられそうだ。

だが、誰もそんな冒険はしない。

ここから先は上流者の住居である。

通行所を持った者だけがこの先に行けるが、もしそれ以外の平民が
入ればそれは誰であろうと即留置所行きとなる。

実はこの2mの石壁の向こうには4mの空堀があり気軽に降りると
まっさかさまに落ちる仕掛けになっている。

首も折らずに生きているとして（重傷含む）、留置所に連れて行か
れた者は10日間の拘留と相場が決まっているがこれがなかなか過
酷。

腕白盛りの少年がいたずらに石壁を越え留置所から戻って来た時に
は声を失っていたという話もあるくらいだ。

ソフィアが宮殿に乗り込むにはどうしてもこの石壁の向こうに行かなくてはならないが、そもそも服装がよろしくない。

ソフィアの着ている鮮やかな青いドレス　これはフューネラル・ドレス、いわゆる死に装束であって普段着るものではない。

まずは身なりを揃えねばならないので、野郎2人が街中に妙齡の女性の服をあさりに行った・・・結果、撃沈されて帰ってきた。

アルシュ王国の身分・性別の差をあまりにも知らないで気軽に行つたのが間違いの元である。

まず、男性が女性の服をプレゼント以外で買う事はありません。

そもそも、この平民の街で貴族が着るような服は売っていない。

アルシュ王国は絶対君主制度のもと、身分格差が王貴武農工商と分かれており王貴が内城に、武が外城（石壁内）に、そして農工商がそのまわりに住んでいる。

服装も食べ物も建てる家の材質も全てに規則があり言葉のアクセントも上流と下流ではまったく違っていて、キリークからいきなり来た人間が太刀打ちできるものではなかったのだ。

「こええええええええ・・・俺、逮捕されるかと思った。」

「キリーク王国の免許証持ってて助かったな。」

「まったくだ。免許取つといてよかった。」

車の中で動悸が収まるのを待ちつつお互いの無事をかみしめあう2人。

「あの・・・」

後部座席からソフィアが声をかけてきた。

「はい！なんでしょうか？」

即座に反応するハリー。

「シャルルの川原で拾った石をまだ持つております？」

「ええ、持つてます。少々お待ち下さい。」

川原にあったちよつと変わった石を車にいくつか積んで来たので早速王妃にお披露目をする。

「一つお借りします。」
ピンクがかつた石を手にしたので、どうぞどうぞ全部差し上げますと返事をするハリー。
拾っていたのはバスコーだったのだが・・・
「車を出してください。この道をまっすぐ行って・・・あの赤い看板を出している店を左に」
後ろから白く細い腕が伸びて道を指し示す。

運転しない助手席のハリーはそのたおやかな手の指先をじーっとな見つめている。

女性らしい小さな手は白く透き通っている。その指先は健康的なピンクに染まり、その爪は綺麗に切りそろえられて絹で磨いたかのよう輝いている。

時折、指示とともに右へ左にゆれる手首の動作は滑らかかつ優雅。

ああ、この手に触れたのか。

じーーーーー・・・
ん？

車がいつの間にか止まっていた。

バスコーがハリーの顔を覗き込みながらニヤニヤ顔で怒っていた。

『こいつ助手席で何考えてんだ！』

車が止まった先に見える路地の向こうをソフィアは指差した。

そこには精霊王を祭っている祭壇場があった。

4 mほどの高さがある四角い塔で、出入り自由・祭壇に何をお供えしても自由・お供え物を誰が持っていくても自由という奇特な祭壇である。

ソフィアがそこに何かあると言うのなら間違いはないのだろう。

バスコーは車にあった余り物：未使用ノートと鉛筆7本を持って祭壇に向かった。

すぐに帰ってきた彼の手には平民の木染ワンピースと貴族のものと

思われる派手なドレスが握り締められていた。

木染ワンピースを着たソフィアはとても可愛かったがそのままでは浮き立っている。

長い髪をナーノが四苦八苦して編み上げそのボサボサ具合でなんとか街と釣り合った。

ついでに顔に土をすりこんでもらう。

「ここから10分ほど西に行った所に私の侍女だった者がおります。そちらを頼ることにしましょう。」

「また案内してもらえますか？」

「もちろんです。」

「それじゃハリー。お前が運転しろ。」

「え！なんつ……うー……しゃあねーなーあああ……」

空は夕暮れ。

街に灯りがともり、どここの窓からもおいしそうな匂いが漂っていた。

第七章

「!!!!」

人間、あんなに目が開くものなのか。

ソフィアの後ろに立っていたバスコーにはそれが丁度よく観えた。ソフィアが叩いたドアの小窓から覗いた目がみるみる小窓比率100%まで大きくなったのだ。

すぐにドアが開いて一行は奥に入るよう促された。

「アネット。まだわたくしを覚えていてくれたのですね。」

「ソフィア様。貴方を忘れる時は私の心臓が鼓動を止めた時でございます。病でお亡くなりになったとお聞きしましたが、生きておられたのですね・・・ああ、全ての神靈に感謝します。」

静かに佇むソフィアの前にアネットは膝を付き畏敬の念を込めその右手を両手で包みキスをしてから押し頂いた。

「ありがとうアネット。さあお立ちなさい。少し話がしたいわ。」

つややかな茶髪に茶の瞳、歳は40歳くらいだろうか、こざっぱりした部屋に簡素な身なりをしたアネットはとても品の良い女性だ。夕食を用意してくれると言うので、テーブルに4人で座って雑談の最中

「階級関係無く王女付きの侍女になれたんですね。うちの王室より進んでるかも。」

と、ハリーが言った途端にガス台の方で何かを落としたような音がした。

「・・・」

あー！ワケありだったか？

「おっ！そういえば、車の中にサキイカがあったはず。ちょっと持

ってきます。」

急いで立ったハリーだったがバスコーに押さえられた。

「静かにしてろ。」

「・・・」

ちょうどその時アネットが食事を持って来た。

アネットが王女付の侍女をしていたのは今から15年前の事。

それから3年間ソフィアの側で仕事に励んでいたのだが・・・

「その頃、今は亡きシャーデル王が引退を決めたのです。次に誰が即位するかで城内が大変緊張していました。私の父が第二王子シャンプル様を擁立する側に立ち、結局第一王子フェルーン様が王位を譲り受け即位しました。それで私は侍女を辞める事となったのです。」

「多分、いろいろあったのだろう。」

キリークは絶対君主制度になってからまだ100年しか経っていない。

しかも、最初に立った王は武勲の誉れより自然科学重視の学者肌であったため絶対というところが弱く、最近では立憲君主制に移りつつある。

しかしこのアルシュという国は500年間、紆余曲折はあろうとも王族が頂点に立ち続けているのだ。

「私も罪人として牢獄に入れられましたが、ソフィア様からの恩赦で釈放され身分剥奪だけで済んだのです。」

「も？」

アネットは俯いたままの姿勢で視線だけハリーに流した。

「父は牢獄で獄死しました。」

「そうでしたか・・・失礼しました。」すかさず謝罪するバスコー。

「・・・申し訳ありません。」

ハリーはもう絶対何があるつと誰に頼まれても、今後一言だって言葉を発するものか！と堅く決心した。

第八章

その晩、ソフィアとナーノをアネットの家に泊めさせ、二人は車中泊としゃれこんだ。

次の日も朝食を5人分作ってくれたアネットはさすが元侍女である。ソフィアの前には基本を周到したテーブルセッティングがほどこされ、次々に出される料理は量は少ないもののフルコースが並び完璧な給仕のもと食事は終了した。

もちろんソフィアも作法どおりの優雅な手つきで完食した。

ソフィアと同席する事を許されたその他3名はまったく違う料理を出され、目の前の美しい食事風景に見入ったままなんとなく食事を終えた。

さて。

アネット自身は岩壁の中に入る事が出来ないため、旧知の商売人・ロロット商会のバッカラン会長にさりげなく4人について相談した。110年前、商売を始めた彼の曾祖父ロロットがアネットの4代前ツィール伯爵に鼻屑にしてもらったのを契機に商売が繁盛した為、バッカランはツィール家断絶後もアネットの面倒を見ていたのである。

バッカランはこの話に興味を持ち4人と面会し、ソフィアが本物であると確信した。

ロロット商会は岩壁内にも店舗をかまえている。

そして、各屋敷に注文の品を配達するサービスも充実していた。その配達リストを見せてもらったソフィアはそこに何人かの知己を見つけた。

こうしてソフィアは単身、岩壁の向こうに乗り込む事になった。

空に小さく雷鳴が轟く。

朝から雲がどんよりとたれこめ、まだ雨は降っていないものの横殴りの風が街路樹をなぶる・・・嵐の予感。

サマーサ・ルン・エズバラン。

彼女はかつて王族専属の乳母であった。

子供も2男2女を授かり娘は結婚して手元から離れ息子達は近衛兵舎に引越した。

今は広い屋敷で近衛局に勤めている夫、リスターと共に幸せに暮らしている。

サマーサは、いつもより早く目が覚めてしまい寝室の出窓からそつと外を眺めた。

『いやな天気ね・・・』

これでは今日のお茶会は中止だね。

庭を見れば剪定された木々が右に左にその枝をゆらしている。

その向こうに見える道路に一台の運搬車がゆっくりとすべりこんで来た。

「？」

車は道なりに左に折れ裏玄関へと向かった。

サマーサは、なんとなくそれを追って寝室から洗面所に移動した。

洗面所の窓から下を覗くとちょうど車から一人の男が木箱を抱え、運びこもうとしているところである。

それほど大きくないようだが・・・誰かからの贈り物？

「なんでしよう・・・」

心がときめく。

贈り物ならば事前に知らせが来るものでしょうに。

でも、今日はどうせどこにも行けはしないのよ。
期待するほどのものでは無いかもしれない。
また夫が下らない防具を買ったのかも・・・でも
あれは私宛のものよ！間違いない！！
いったい何故こんなに心が浮き立つのかしら。
何故あれが自分への物だと信じているの？

期待しちゃだめよ。
期待しちゃだめ。

と、つぶやきながらいそいそと服を着替えて階下に下りていくサマーサであった。

木箱には確かにサマーサ宛と書かれていた。

そして送り主の名はエイフォーズと書かれている。

エイフォーズ！？

サマーサは遠い昔、自分の名前を書けたと膝元に駆け寄り報告に来た幼女の顔を思い出した。

自分の名前を並び替えて『これからはこの名前でお呼びなさい』と宣言して怒られたあの可愛らしくもおしやまな王女・・・
しばらく2人だけで秘密の名前として使っていたその名前と同じ・・・
何故？

「・・・これを2階に運んでちょうだい。」

執事が怪訝な顔でサマーサに一言伝える。

「奥様。まだこちらの品は中身を検めておりません。」

「結構よ。2階にお運び・・・そうね、使っていない客室で中身を検めましょう。ついてきなさい。」

執事はサマーサのあとに続いて2階に上がった。

そして合図を受けた護衛が荷物を持って2人に続く。

客室はほとんど使われていないせいか、それとも悪天候のせいか、陰湿な雰囲気をかもし出していた。

箱は意外と大きく、室内に置くと存在感がある。

執事が護衛の男に開けるよう指示すると、ボールでキュツキュと簡単に解いていった。

最初に中から見えたものは・・・趣味の悪い柄の布だった。

多分、詰め物に使われているのだろう。

そして・・・護衛が力をこめて上部の釘を抜いたところで箱が壊れ、中から意外なものが出てきた。

妙齢の女性。派手で趣味の悪いドレスを着て小さく膝をかかえている。

護衛は反射的に足でこの不審者を蹴り上げた。

ガッ

異様な音と共に女性は奥のベッドまで飛ばされた。

が、次の瞬間絶叫したのは護衛の方だった。

「ぎゃつっつっつっっー！！」

つま先が骨折していた。

執事は流れるような動作で傍らにあるサーベルを抜き、ベッドにもたれかかりながらこちらを向いている女性に突きつけた。

女性はそれにひるむ事なく、軽く息を吸うと凜とした声でかつての乳母に命じた。

「サマーサ。この者達を下がらせなさい。」

怪我をした護衛をつれて執事が2階から降りてきた。

使用人たちは何事かと階下から見上げていたが、執事に追い払われていつもの仕事場についた・・・だが、サマーサが客室から出て来る気配は無い。

執事は、急いで近衛局本部にいるはずのリスターに使いを出した。

第九章

リスターは馬に乗り、急ぎ我家に帰ってきた。

とてもいやな胸騒ぎがする。

サマーサが会っているという女は何者だ？

使者が言うにはやたらと居丈高だったとか・・・何か脅されてもいるのだろうか。

そんな事に臆するようなサマーサではないと思うがあれでも女性である。

今行くから待つてる！

そんな意気込みで2階に駆け上がり件の客室の扉をボタンくたん！と開けた。

「！！」

「！・・・あなた。早くお閉めになって。」

妻に促されてリスターは後ろ手で扉を閉じた。
信じられない。

いや、事実だ。

しかし内部報告ではキリークで発狂死したはず。

「リスター。久しく会わずにいました。わたくしをお忘れでしょうか？」

ああ。この声は間違いない！

リスターはすぐに片膝を付き騎士の礼をとった。

「我アルシュ王国の高潔なる血の一族にして全精霊の祝福を受けしソフィア・エール・モザレヌ様・・・よくご無事であらせられました。」

型どおりの挨拶と共に右手にキスをする。

そう。型どおりの挨拶ではあるが、今のソフィアの真実をまさに突いていた。

全精霊の祝福を受けしソフィアは柔らかく微笑んでリスターを見つめた。

生きていると言われていた人間が実は亡くなっていた。

死んだと言われていた人間が実はまだ生存していた。

そんな事はよくある事だ。

驚くほどの事でもない。

リスターは外部からの報告書がまったくのでたため キリーク王国が何らかの意図を持って流してきた誤報なのではと疑った。

それほど目の前の女性は記憶の中の王女とそっくりだったからだ。

だが・・・確認が欲しい。

「只今朝食の用意をさせます。少々お待ちいただけますか。」

そうことわりを入れて、リスターは妻を促し2人は客室から出て隣の部屋に入った。

「なんですの？」

「おまえ・・・あの方は間違いなくソフィア様だと思つか？」

「ええ。もちろんよ。」

「何故？」

「あの方が幼少の頃に使っていた秘密の言葉を知っていたからだわ。」

「間違いないのか？」

「疑っているの？」

「とても重要な事なんだよ。とてもね・・・」

「・・・わかったわ。それではあの方に湯浴みをしていただきますしょう。」

「？」

「んふっ・・・ずっつと気になっていたのよ。あの品の無い低俗なドレス！早くお脱ぎになっていただきたいわ！！私が直接湯浴みをしてあの方が本物かどうか確かめて差し上げましょう。」

「ああ。そうしてくれ・・・」

ドレスがどうこうはさて置いて、乳母だったサマーサがその身体を見れば正体がわかるに違いない。

ソフィアが湯浴みをしている間、館内は朝食の仕度・客室の再清掃・使用人の再編成でおおわらわになった。

そしてリスターは信頼できる者を2人、早馬を使って呼び寄せた。

第十章

湯浴みが終わりサマーサが用意した衣装：白絹のドレスにアルシユ独特の民族衣装をデザインしたガウンをまとったソフィアが客室に戻ってきた。

その神秘さにリスターは思わずうめき声が出そうになりあわててソフィアの後ろに控えている妻に視線を移した。

サマーサは夫の視線を受け、こくこくと頷いている。

やはり本人なのか。

リスターは軽く深呼吸するとソフィアに向かい2人の女性を紹介した。

「ソフィア様。この者達は私の信頼する騎士で、ゼナイ・ラン・ボレルとテレーズ・ラン・デュクロと申します。」

2人は騎士の礼をとりソフィアの右手にキスをした。

女性ではあるが武の者が持つ気骨を感じさせる良い顔をした騎士だ。ソフィアが礼を受けくつろぐように言うと、ゼナイとテレーズは一礼して出入り口のドアに向かい警護についた。

今後ソフィアがこの屋敷を後にするまで24時間一人が室内、一人が室外で立ち続ける事になる。

遅い朝食を終え、3人は丸テーブルを囲みお茶を飲んでいる。

窓は豪雨と強風にガタガタゆれ、時折雷が轟き窓が光った。

室内が暗いため蝋燭が持ち込まれ、仄暗い茜色が3人に柔らかな影をつくる。

口火を切ったのはリスターだった。

「ソフィア様は今後どうなさるおつもりですか？もし誰にも会わず静養したいのであればこの屋敷にいつまでも滞在していて下さい。」

田舎に隠遁したいのであればそのように手配します。」

「ありがとうございます。でもわたくしはどうしてもしなければいけない事があるのです。」

「ご命令いただければどのような事であろうと我力の及ぶ限りの事は致します。」

「まずは、私の子供を呼び寄せたいと思います。」

「・・・ソフィア様の御子ですか？」

「ええ。名前はナーノといます。神霊の加護の元生まれた子です。」

リスターは己がいかに重大な事に巻き込まれたか思い知った。

ソフィアの子ということはキリーク王ヴァレリオの子でもある。

2つの王国の問題を自分の肩に担げるか？

「それは是非お会いしたく存じます・・・で、その御子はいずこに？」

「岩陰外そとにあります。その子には2人に守護の者が付いておりますのでこの3人をわたくしと共に置いていただけないでしょうか。」

「承知致しました。通行書を発行します。」

リスターはドアに立つゼナイを呼ぶと通行書の申込書類を公安局に取りに行かせた。

と、丁度その時ドアの外からテレーズが入室してきた。

サマーサに確認して欲しいことがあるとの執事からの伝言を伝えるためである。

サマーサが出て行き室内が2人になったところで、ソフィアの顔つきが変化した。

リスターもそれに気がつき身を引き締める。

「先程どうしてもしなければいけない事があると申しました・・・」

「はい。」

「元近衛師団副長エズバラン卿。」

「はっ！」

リスターは背筋を正し命令を待つ。

「わたくしを我兄にして現国王フェルーンの元につれておゆきなさい。」

ソフィアの命令は予想の範疇ではあった。が、それは・・・

「・・・ソフィア様。その結果がどうなるか判っておられますか？」

「必ずしも悪い方へ転がるものでもないでしょう」

「いえ。貴方は今のフェルーン王を知らないのです。肉親の情で近寄ることはおやめ下さい。」

「・・・確かにわたくしは最近のアルシュの情勢を知りません・・・エズバラン卿、教えていただけますか？」

ソフィアは手にしているカップをテーブルに置き真剣な眼差しでリスターを見つめた。

「判りました。」

リスターはその眼差しから視線を逸らせ、天井を見つめながら出来るだけ完結にそして正確に国内の変化を伝えた。

第十一章

12年前、第一王子フェルーンは弟を斃し王位についた。

しかし即位の後も王位継承権争奪の余波が残り宮中の貴族間に対立の空気が色濃く漂っていた。

そんな折にアルシュの南部から希少価値の高い金属の大鉱脈が発見されたのだ。

フェルーンはそれを手にキリークに接近した。

結局妹とキリーク王との結婚をまとめ上げ、技術協定も締結してきた事で宮廷内ではフェルーンの評価が一気に高まった。

キリーク側に見れば大鉱脈の事もさることながら、アルシュ王国という歴史は長いが与し易い国に近づき、更なる経済発展の起爆剤にするという構想と新興国として他の国に軽んじられない為の布石を打っておきたかったという思惑もあって一概にフェルーンが有能だった訳ではないのだが・・・

キリーク王ヴァレリオとソフィア王女の結婚を契機にキリークの高度な機械文明がアルシュに流れ込みインフラ整備から始まって土木関係はもちろん他業種も勃興した。

アルシュ王国は高度成長期に突入したのだ。

国内が景気に沸いて庶民が王の手腕を賛美していた頃・・・フェルーン王による肅清が始まりつつあった。

そもそも弟王子を支持していた勢力はこの王子の性格“冷酷にして愚直”に反発していたのだが、国内の支持が絶大であるこの時期にその性格が表面化した。

フェルーン王即位の時には弟王子を擁立した貴族は家族を含め全て投獄された。

それを第一次肅清とするならば、第二次肅清の始まりである。

まず最初の犠牲者は父であるシャーデル王。

あまりの急激な経済発展は国にとって良くない。緩やかな成長と国民全体の民度向上に努めると事あるごとにフェルーンに注意を促したのが仇となったのだらう。

引退したにもかかわらず国政にしゃしゃりこんでくる父を宮殿の自室に軟禁し、以後一歩たりとも室外へは出さなかった。

やがてシャーデル王は足を患い床につき肺に水がたまって亡くなったのだ。

それからはフェルーンの思うがままに国政が動いていった。

例えば。

国内が景気に沸いた頃、庶民の中には莫大な資産を手に入れた者が数多くいた。

その者達にその資産に見合う巨額の税金を課し、反発する者は公安局が再教育する事を徹底させた。

また、農民が土地を離れ都会に移り労働者になる事を禁止した。

かと思えば一村一校を合言葉に全国に小学校を建築した。

しかもその学校に入れる身分は武以上と決められたため農村に建った学校はそのまま物置小屋となってしまうた。

その他にも矢継早に勅令が下った。

その内容は全て、王貴武農工商の徹底・身分格差の鮮明化である。容赦の無い公安の締め付けで国内景気は停滞して行った。

そして宮廷内は・・・もつとはつきりと変化した。

以前の自由な空気はなくなり、規則重視・身分重視。

一つ上の階級の人間が右といえば右であり白と言えば白となる。

そして、その一番頂点に立っているのは・・・フェルーン国王である。

今や独裁者となりつつある国王。

もしフェルーンがソフィアの首を刎ねよとひとこと言えば、誰も諫める事すら出来ないのだ。

第十二章

ソフィアはリスターが語る最近のアルシュ情勢に静かに耳を傾けていた。

そして全て聞き終わると、ちよつと困つたような顔をして一言つぶやいた。

「お兄様つたら・・・お変わりにならないわね。」

その表情を見てリスターは思い切つてソフィアに尋ねた。

「ソフィア様ならあのお方を変えることが出来るでしょうか？」

「わたくしにそのような力はないですわ。」

「でも」

「エズバラン卿。フェルーン兄様がなぜそこまでやってしまうか判りますか？」

「いえ。わたしには想像がつかないのですが・・・」

「自分に自信がないからです。」

「・・・」

「内に無いならば外の規則を・・・信じられる今のシステムに縋るしかないでしょう？」

「ではどうすれば良いのです。あの方に善く国を統べていただくには・・・」

ソフィアはぬるくなつたお茶に口をつけ一口飲んだ。

「あなたは、アルシュ王国に何故500年もの歴史があるのか軽く考えているのではなくて？」

「そのような事は決してありません！」

何故そのような事をおっしゃるのか！心外だ！

「今ある規則はこの500年もの間、数え切れぬほどの国民が練り上げて来たものの一つの形です。そして暴君の時も賢君の時も王貴

武農工商に変わりはありません。ならば。」

「ならば？」

「この規則には血が通っています。窮する者を救う術が必ずあみ出されている。それも500年に及ぶ英知と共に。調べなさい。徹底的に。国を、国民を、そして吾身を守る知恵が歴史のそこここに埋まっています。これを見つけ利用出来るのは同じ国にいる者だけです。」

「・・・はい。ソフィア様」

エズ balan 卿はソフィアに頼ろうとした姑息な自分に赤面した。安易な道などない。ただ我々には500年の歴史がある。

それを掘り出し今に蘇らせ国政に揺さぶられる国民を救うのは、同じ国にいる自分達にしか出来ないのだと・・・

ソフィアは、リスターの様子にニッコリ笑い言葉を続けた。

「どんな事があるうと生き抜く事です。私がこの家を頼った事で貴方が窮地に陥り投獄されるとすれば、今のうちに逃げ道を作っておきなさい。」

「！」

「ですが、今一番シンプルでお互いの利にかなう方法は・・・あなたが私を拘束してフェルーン王の元に差し出す事です。」

「ソフィア様！我忠心を疑うのですか！？」

「いいえ。」

ソフィアは立ち上がり、エズ balan 卿に向かい膝を折った。

啞然とするエズ balan 卿に相対しソフィアは静かに願いを告げた。

「私を捕らえて王に直接お引き渡し下さいませ。エズ balan 卿。」

第十三章

元近衛師団副長という肩書きは歳をとり現役を離れた今でも十分に威力を発揮した。

ソフィアがサマーサを頼りエズバランの館に来てから10日後、かつての自分の兄、現アルシュ王国国王フェルーンに直接面会することが出来たのだ。

宮中で一番荘厳な作りの黒の間。

それほど大きくはない部屋だが、前後左右の鉄壁に黒曜石のタイルが埋め込まれ、床はみごとな赤い大理石が使われている。

よく見ると床の四方に広めの溝が切られていて隅に置かれた彫像の裏にある排水口に繋がっている。

もっとよく見ると壁も床も縦横無尽に傷が走り不自然な装飾を作り出しているようだ。

そして左右の壁には完全武装の近衛兵が10名、彫刻のように身じろぎもせず立っている。

中央には簡素な作りのテーブルが置かれ椅子にはソフィアが座っている。

ソフィアは両手をテーブルの上に置いているがその手首には禍々しい鉄の手錠が鈍く光る。

対面に立つフェルーン王はそんなソフィアの姿をしばらく眺めていた。

やがて、ソフィアに近づくと丁寧に結び上げられた髪の毛のピンを一つ一つと抜いていった。

その度にさらりさらりと金が揺れて落ちる。

暗い室内で艶やかな光沢を放つソフィアの髪を一房すくってその感触を確かめると、今度はうなじに手を当てやがてそれをツツ・・・

と首にそって前に滑らせた。
そのラインは斬首を意味するのか。だがソフィアの表情に変わりはない。

フェルーンはふつと微笑みソフィアから離れ、テーブルの横に立った。

「元気そうだな。ソフィア。」

「お兄様もご健勝何よりでございます。」

「キリークで死んだと聞かされた。」

「ご覧のとおり生きております。」

卒なく答えるソフィアをしばらく無言で見つめるフェルーン。

「・・・何をしに来た？」

「お兄様に会いにきました。」

「そうか希望がなくなつて何より。ではさらばだ。」

部屋を出ようとするフェルーン。

ソフィアは初めて身を起こしフェルーンに顔を向けた。

「お兄様のお役に立つために来たのです！」

「役に立つ？」

なにやらおかしな事を聞いた。

役に立つだと？

フェルーンは再びソフィアに近寄り怒号を上げた。

「おまえがキリークで馬鹿なことをしてくれただのを俺が知らないと思っているのか！最初にヴァレリオ王から事の顛末を聞かされた俺の気持ちを・・・おまえは！！！」

「お兄様、どのような事を聞かされたか判りませんが、これだけは信じてください。私はあのユリカゴまで行くことが出来たのです。」

「ああ、聞いたとも。精霊王に手を出そうとしたとなー！！！」

「それではわたくしもはつきり申しませう。あのユリカゴのなか

に入り精霊王に会えたのです。」

「たわけ！自慢げに話す事か！！」

「いいえ。自慢ではなくフェルーン王に交渉しているのです。」

「！？」

「この世に生きている者の中で唯一わたくしだけが精霊王と直接コ
ンタクト出来たのです。そして、わたくしはあなたの妹なのですよ
？」

「・・・」

「精霊王の力はすばらしいものでした。あの力を手に入れたキリー
クが発展したのは当たり前です。」

「・・・」

「わたくしはね？お兄様・・・キリークの宮殿から見えるユリカゴ
を見て不思議に思っていました。たかだか100年でアルシユ国
を追い抜きエネルギー供給の名のもと近隣諸国を配下に治めたキリ
ークという国・・・でも、それは精霊王を味方にすれば誰にも出来
る事ですわ。100年前はアルシユ王国の方がキリークよりはるかに
進んでおりましたものを。」

なるほど。言いたいことはそういう事か。

「・・・我々はキリークのおかげで豊かになった。キリークの味方
になっても敵にはならん。」

「敵になる必要はありませんわ」微笑むソフィア。

「わたくしがもう一度精霊王にお会いしてお兄様の伝言をお伝えし
ましょう。お兄様はこの国を・・・アルシユ王国をどのようになさ
りたいですか？」

以前リスターに向かい『フェルーン王は自信の無い王』だと評した
ソフィアがアルシユ王国の未来像をその王に訊く。答えは出ている。
ただその口からそれを言わせるだけの質問・・・そしてフェルーン
は答えた。

結果、

「キリークが有する精霊王エルをアルシュ王国につれてくるように。その為ならば協力は惜しまない」

アルシュ王はソフィアと密約をかわした。

そしてソフィア一行に一人の男が加わることになった。

その名はバリス・ラン・フォールゼン。

公安局環境課に所属する精悍な顔つきの男だった。

第十四章

キリーク王国ルーパーパスに立つ白亜の館。

アルシユ王国の大使館である。

その広い館の一室に5人の人間がテーブルをかこんで朝の食事をしていた。

『これが最期の食事となるかもしれない！』

そう思いながらガツガツ食べているハリーをしようがねーなーと温かい目で見ているバスコー。

その向かい側では出されたものを黙々と食べるナーノと野性味のある顔つきながら何を考えているのか判らない寡黙な男バリス。

そして上手にはソフィアが座り優雅な手つきでデザートにスプーンを差し込んでいた。

いつもと変わらぬ、いつもと違う、それぞれの胸の内。

これから3時間後にキリーク王国国王ヴァレリオと謁見する予定だ。

バリスは2日前ソフィアから直接言われた言葉を思い出していた。

「謁見は10分ぐらいで終わるでしょう。その後は塔へ上がり精霊王に会います。」

ソフィアはすでに確定済みの事のようにきっぱり言った。

そして、自分もそれを見越して算段している。

想定内・想定外を事前に考慮し各所に根回しをしたのはいつも通り。だが心の中では聖源室への入室まで確信している。確信を持つ自分は冷静ではない・・・見落としは無いか？

表面上は機械的に食事を口に運びながら頭の中では複数のシミュレーションがめまぐるしく展開していた。

ハリーとバスコーは今でこそ食事を味わう余裕があるものの、キリーク王との謁見が確定した時から自宅に戻り、あることに没頭していた。

昼夜休み無く今まで溜め込んできたコザガラに関する研究を本にまとめ上げ全世界にいる聖骸霊録研究者に郵送したのが昨日のこと。本にしたものも出来なかったものも全ての収集物と資料は地元大学に寄贈し、ようやく今日の目を迎えたのだ。

今までのように気楽にコザガラを追う暮らしが終わる・・・かもしれない。

なんとなく2人ともそう思っていた。

ナーノは辛目の味付けをした肉を食べながら誰かが近くにいる気配に苛まれていた。

それはソフィアのような気配、だけどソフィアではない。

父・・・だろうか。もうすぐ会えるから？

「あなたの父親はヴァレリオ王です。けれど王はそう感じてはくれないでしょう・・・貴方は精霊王の子とおなりなさい。」

まだ会った事のないヴァレリオ王・・・写真で見せてもらった彼の人は、金髪を後ろに流し青く鋭い眼差しと眉間に深い皺を寄せナーノを睨んでいる。

これが父さん・・・正直怖い。とても僕を認めてはくれないだろう。でもいい。僕には母さんがいる。

ナーノにとって母ソフィアは絶対神のごとく神聖かつ心の支えだった。

母さんがそういうなら僕は精霊王の子になるう。

そしてソフィアは・・・何も考えてはいなかった。そう。何も！

謁見の間にはいつもより多くの近衛兵が配備されていた。いや、謁見の間だけではない。

宮殿内部全てに準戦闘体制が敷かれていた。

5人が謁見の間に入るとそこには近衛兵だけで正面の玉座は空席のままだった。

『こ……殺される？』

ハリーは傍目にも判るほど臆してバスコーの袖をそれとなく掴んだ。バスコーはそんなハリーを無視して先頭に立つソフィアの後ろを静かについていく。

ソフィアは首元から胸元まで白いレースに包まれ、そこから下は純白のサテンが腰までのゆるやかなラインを描いていている。

歩を進めるたびにドレスのドレープが赤い絨毯の上でゆるやかにひるがえった。

威風堂々。

胸を張り姿勢正しく先頭を歩くソフィアは王妃その人だった。

5人が玉座の前に並ぶと王が入室してきた。

写真で見るより老けて見える。

ヴァレリオ王は今年40歳になったばかりのはず。

やはり眉間の深い皺はそのままに鋭い視線は冷厳より猜疑の色が濃い。

王の入室と共に膝を折りその場に控えていた5人にヴァレリオは一瞬目を向け玉座に座ると傍らの侍従が近づき何かを耳打ちする。

本来の謁見では相手側の名前を読み上げ一人ずつ王へ紹介するのだからそれが簡略化したのだろう。王は頷き左手を上げて下からせた。

しばらく沈黙が続いたが最初に口を開いたのはヴァレリオだった。

「ソフィア・・・成程、聞いていた以上によく似ている」

「私は生き返りました」

ヴァレリオは立ち上がりソフィアに近づき顎をつかむとそのまま上に引き上げてソフィアを立たせた。

しげしげと顔を覗くと顎から手を離し数歩下がってまた上から下まで執拗に見る。

ヴァレリオはソフィアの死を確信していた。

10年前に変形変色してしまったソフィアの亡骸を石棺に納めたのは自分だ。

アルシユ国王の親書が届きソフィア生還の報を受けた時には乾いた笑いしか出なかった。

何かの思惑を持った偽者だと・・・だからこそ直接謁見することにしたのだ。

「エルの力か？」

「ええ・・・それとあなたの力です。」

「わたしの？」

「貴方がわたくしに会いたがっていたのです。」

王の顔がぐしゃりとゆがんだ。

「は・・・ははは、馬鹿な。君になんか会いたくもないし顔も見たくない！ましてや生き返ってなぞほしくもない！！」

「私にはわかりません」

「では墓に帰って静かに眠ってる！」

王は剣の柄に手をかけようとした。が、ソフィアは臆せず祈るように手を組んで王に近寄った。

「私を塔に。」

「エルか」

「ええ」

「あれをどうするつもりだ」

「本来あるべき所に戻します」

「今はここにあるのが本来の姿だ。あれなしに我々は生きていけるか！」

「それはあなたの都合でしかないわ・・・精霊王の言葉を聞いて。」

「精霊王の言葉!？」

ソフィアは王から離れナーノに立つよう促した。

10歳ほどの品のいい少年。

その姿は中央塔に閉じ込められたわが子と面影が似ている…エルが乗り移っていると閉じ込められたままのわが子に。

「私が地に下りた時に生まれた貴方と私の子よ。」

「・・・・・・名は？」

「ナーノ。」

「ナーノか。人が精霊か？」

「人です。」

初めて聞いたナーノの声は少年らしい少し高めの声。だがそれはすぐに変わった。

「全ては変わる。螺旋を描いて・・・」

精霊王エル。

王は総毛立ち後ずさった。が、すぐに背筋を伸ばし目の前の子供をねめつける。

「我々も着々と変わっています。ここ数年の進歩は目覚ましいもので平均寿命も毎年伸びている。幼児の死亡率に至っては1桁の数字です。産業・工業・医療すべてがこの数年でどれだけ向上したか。」

「その変化はまもなく終わる。おまえのために螺旋は上へ駆け上が

った。そしてその回転は内へ向いている。」

「何を…我々はこの地上に平和と安定をもたらします。それまで進み続ける！そのためにはエルの力がどうしても必要です…あの力が無くなればまた貧困と疫病におびえなくてはならない。私がこの国の人々にそんな生活をさせられると思うか？」

「あなたの望みと我望みは違う。王は国を見ているが我は星を見ているのだ」

「視野が狭いとも言つつもりか…何と言われようとかまわん！」

王は右手を上げた。

それは全ての牙への合図。

王に忠実な戦士たちは一斉に5人に襲い掛かった。

第十五章（前書き）

一応おことわりしておきますが、非常に生臭い話になっています。

第十五章

バリスは反射的に服に仕込んでいた武器を取り、襲い掛かる近衛兵に備えた。

想定内の展開。

だが。

「!!!」

爆風と轟音がバリスの鼻先をかすめていった。

今しも襲いかかろうとしていた近衛兵が一瞬のうちに天井まで巻き上げられ空中でその四肢を引きちぎられていく。

壁際から5人に向かい剣を振り上げた姿勢のまま近衛兵達は次々と空中に舞い、悲鳴を上げる間もなく部屋中に散っていった。

謁見の間はたちまち疾風による粉砕場と化し金属が舞い上がりこすれあい拉げる耳障りな高音と肉が引き裂かれる粘液の音がこだまし、天井から近衛兵の洗練された軍服とローブの切れ端が舞い落ちた。後ろの壁から始まり両脇の近衛兵を撒き散らした嵐はたちまち王へと辿り着き、凍りついたように立っている王のローブがふわりと浮いた。

と、突然ソフィアが王のもとへと走り腕をひろげ、その首に抱きついた。

ソフィアが王に何かをつぶやいたその瞬間、王の首から下が捻じ切れ弾け部屋中に四散した。

『血狂風・・・』

バリスの脳裏に一つの言葉が浮かんで消えた。

王死す。

謁見の間、無残に砕けた玉座の上に王の首がぼつんと乗っている。その周りには無数の引き裂かれた肉片がまるで赤い花のように床に散っている。

多分、いや間違はなくその誰もが自分が死んだ事さえ気が付いていないだろう。

全ては一瞬にして起こり一瞬にして終わったのだから。

5人はソフィアとナーノを先頭に塔への廊下へと向かった。途中で警護しているはずの衛兵もやはり、拉げ潰されて見る影も無い。

塔への廊下の突き当たりにあるエレベーター前の守護天使はまるでソフィア達を待っているかのようにドアを開けたまま佇んでいた。ゆっくりと昇っていくエレベーターの窓から眼下を望めば首都ルーパーズの景色は、10年前と変わらず平和な活気に満ちていた。

エネルギー源隔離施設”ユリカゴ”

廊下をぐるりと周ると、鋼鉄の扉が立ちはだかった。

だが、その扉にはほんのわずかな隙間がある。

バリスがナイフを差し込みゆっくりとスライドさせる。

と、内部には作業服姿の男達が白衣を着て椅子に座っている研究員の後ろに立っており、一斉に5人の方を振り向いた。

作業服の一人が進み出て5人に向かい無言で敬礼を送った。

5人の中からバリスが進み出てやはり無言で返礼する。

残った4人はその様子を呆然と見ているだけ。

バリスは振り返りやはり無表情のままソフィアに向かつて優雅なお辞儀をした。

「ソフィア様。キリーク王国制圧及びユリカゴ奪取は最小限の被害のうちに終わりました。偏ひんに貴方の功績でございます。」

「・・・」

「ソフィア様にはもはや精霊王に直接交渉していただく必要もなく、このまま地上にお帰り頂き今後のアルシュ王国発展の様子を楽しんでいただきたいと思えます。」

ソフィアはその言葉を無言で聞いていたが、傍らのナーノの手を取ると躊躇無く部屋の奥の螺旋階段：聖源室へと向かった。

バリスはすれ違つソフィアの右腕を掴み引き止める。

「どちらに行かれる！出口はあちらです。」

ソフィアは軽く首を横に振りバリスに微笑んだ。

「いけません。」

「？」

「お放しなさい。」

「出口までエスコート致します。」

バリスはななかば強引にソフィアの肩に手をかけ反対方向を向かせると腰に手を回した。

「！」

ピリツと静電気のようなものが2人の間に走りバリスは反射的に手を引いた。

その隙にソフィアはナーノをつれて聖源室へと駆けてゆく。

途中にいた作業服の男達が手を出してはビクツと引っ込めているのはやはり同じように電気に触れたような痛みを感じたからだろう。

「殺せ！」

バリスの怒号と共に近くに居た男がナイフを手にソフィアに襲い掛かった。

ナイフがソフィアのうなじを突きその刃先は確実に脳を貫いた。

手ごたえに笑みを浮かべてその刃を引き抜く男。

ソフィアはそれに引きずられるように後ずさった。

「母さん!?!」

ナーノの声が広いフロアに響きわたった。と、同時に何かが光ったソフィアの傷から光が噴き出しナイフを握った男は一瞬のうちに炭と化した。

「!」

バリスもそれに巻き込まれるところだったが一瞬ゆかを蹴って身を庇う。

「・・・行きましょう。ナーノ。」

ナーノはちょうどソフィアの前で庇われるように抱かれていたため後ろがどうなったかなど知る由もない。

が、繋いでいる手から力が消えていくのを感じ、母を引き上げるように螺旋階段を上がっていく。

「くそっ!」

バリスは傍らに立つ男から剣を奪うとソフィアの後を追った。

第十六章（前書き）

後半に長々と天災の話が続きますので滅入る人はスルーして下さい。
後書きにこの章のあらすじを書いておきます。

第十六章

バリスは剣を片手に階段を急ぎ登ったが2人の姿は無かった。

そして聖源室の入り口はちょうど人が一人通れる程度に開いている。

「ちっ」

バリスが気配を殺して中に入るとちょうど右側にソフィアが立っており、あわててこちらを振り向こうとしたところだった。

間髪入れず剣でなぎ払うとソフィアはその勢いそのまま円形高圧場へと叩きつけられ高温のシールドから蒸気が噴出した。

「!!!!!!!!!!」

悲鳴にならない絶叫が同時に起こる。

10年前の奇跡は起きず、そこには半身シールド内に突き刺さった哀れな女がいるだけだ。

だが、彼女はまだ生きていた。腕だけでエルへとじり寄って行く。その唇は何かをしきりに呟いていた。

もし聞き取れる者がいたならばそれが人の名と知るだろう。

「アルフィード・・・」

10年前、懐妊を知ったヴァレリオがソフィアの手を握り「絶対男だ！名前は・・・アルフィード！」と顔面総崩れの笑顔で命名した名前だった。

ソフィアの指先がエルの額に触れるとエルは眠りから覚めたかのように薄く目を開き身じろいだ。

かくかくと震えが起こり横にすべり落ちたソフィアの手をすぐに彼の手が握る。

ソフィアはその手を握りかえした。

エルは・・・アルフィードはもう一度強くソフィアの手を握った。

だが、もうその手が、指が、そしてわが子を見つめるその瞳が動く

ことはなかった。

ソフィア絶命。

フィールドの外では逃げ回っていたナーノがバリスに追い詰められたところだった。

部屋の隅に逃げ込んでしまったナーノに剣がかざされたその時、聖源室の中の光源が落ち全てが闇に包まれた。

それでもバリスにとってすでに瞬殺する用意は完了していた。躊躇無く剣先はナーノの心臓に向かっていった。

少し考えれば聖源室で光源が消えたという事が何を意味しているか気がついただろう。

それはエルを閉じ込めていたシールドからの光が消えた・・・つまりシールドが無力化した事を意味していた。

だが、バリスは余りにも暗闇で人を殺めることに慣れていた。暗いからどうだというのだ。

闇は俺に有利だ。
静かにくたばれ。

だが。

「！！！！！！」

そこにナーノはいなかった。

力を込めた剣の切っ先が柔らかな壁に抵抗無く刺さるとその勢いのまま壁が崩れ落ちた。

こちらを睨んでいた獲物はもちろん、その奥にある壁もその外にあるはずの建材も何もかもが総崩れとなってバリスは身を立て直すことが出来ないまま楕円体の中を落ちていき、やがてその外壁をも突き破った。

そしてそれを合図にユリカゴは大音響と共に爆発をおこしたのだ
た。

どこまでも青く澄みわたり雲ひとつ無い晴天のこの日。

城は血に濡れ、宮殿内は混乱した。

そしてそこから1km上空で銀色に輝く楕円体、通称“ユリカゴ”
それが何の前触れも無く吹き飛んだ。

中央塔はグニヤリとひしゃげ、その衝撃音はキリークの領地全体ま
で鳴り轟いた。

空は一転にわかには掻き曇り、黒い雲が何処からとも無く湧いては空
を覆ってゆく。

最初はぽつぽつと降った雨がすぐに豪雨と変わった。

そよりとも風が無かった街にヒュツと突風が吹きぬけ、それを合図
に激しい風が地表を駆け回る。

勢いを増す黒雲から雷鳴が轟くと共に雷が降り地上を白く塗りつぶ
した。

首都の路地はすでに川となり白い雷を浮かべて暴風にさざなみを立
たせている。

そんな中、中央塔の上空、ユリカゴだった物の上だけはポツカリと
青空がのぞいていた。

その中心に小さな小さな人影が2つ。

妖精王は今や中天にあり、地上を表情もなく見下ろしていた。

そして、その右手に少年がすがりつく。

「エル！やめて！！」

「」

「みんな死んじやう・・・やめて!!」

「我に止める力はない・・・精霊王として我精霊達を守る力は・・・もう・・・我はこの100年で千年分も歳老いてしまった。」

「エル」

「我分身にして我敵よ。」

エルはナーノを見た。

「おまえだつてわかるだろう。我に王の力は有らず・・・もうこの地上の精霊たちを止める事は出来ない。」

「うそだ!あなたは人を憎んでいるんだ。いいように使われてきたから・・・」

「我が人を憎んだのではない。人が我を憎んだのだ。」
そう言うとエルの姿は風の中に掻き消えた。

一人残されたナーノは天地に入り乱れる精霊達の狂宴を見た。

そして地には右往左往している人の群れ。

眼下の惨劇を見たくないと思えばその眼ははるか彼方まで全てを見通した。

逃げ惑う人々、口々に呪いの言葉を吐き、助けを求め、とにかく目の前の災厄から逃れようとする者達。

今まさに風に叩きつけられ大地に吸い込まれ海に飲まれ火に焼かれ絶叫する人間の姿。

そして天に向かい投げかけられる人々の祈りと怨嗟の声に耳をふさぐ事も出来ず、ナーノはぐらりと空から落ちた。

「ありがとう!!」

「た・・・助かった!コザガラ様よろしく!」

地上のとある建物の上ではバスコーとハリーが空に向かって手を振

っていた。

その先には風に飛ばれながら飛んでゆく2羽の鷹。

ユリカゴが爆発すると共に空中に投げ出された2人を待っていたのは強い上昇気流だった。

落ちては行くがゆっくりで気圧差からも守られているらしく耳鳴りひとつしなかった。

2人は口にこそ出さないが“これは童話で読んだアレだろ！”と確信していた。

やがて地表が近くなると大きく立派な鳥が近づいてくるのが見えた。そしてついにハリーが一言

「うわああやっぱりコザガラ様だ！」とつぶやいたのだった。

童話どおりにその羽ばたきに合わせて手を伸ばすと大きな驚がしっかとその腕をつかみ2人を地上に運んでくれた。

階段を降りて建物から出てみると、道路の水が川となって低い土地へと流れていくのが見えた。ここは山手、首都ルーパスの中でも洗練された中流階級が住む街だ。

「おい！あれ！！」

バスコーが目ざとく何かをみつけ指差す。

その向こうに空から一直線に地上に落下していく黒い物体を見た。

「行こう！」

2人とも躊躇することなく走り出した。

「ナーノ！」

ナーノは誰かが自分を呼んでいる声に気がついて目を開けた。

バスコーとハリーが心配げに顔を覗きこんでいる。

宮殿から1kmも離れていない芝生の庭園にナーノは倒れていた。

あちこちに地割れがおき、芝の緑に黒々とした土がいくつも横切っている。

柵の側を流れる小川は今や濁流となり音を立てて土を削る。

「ナーノ？起きれるか？山手の方に行こう。ここは地割れがひどい。」

「もうだめ・・・もうこの地上のどこにも逃げるところは無いんだ。」

「なに弱気なことを言ってるんだ。さあ！」

ハリーがゆっくりナーノの身を起こし怪我がないかどうか確かめつつ身体をさすった。

「どこに行くというの？この天災のあとに何が来るか知っているの？寒波と干ばつがやってくるんだ。木は枯れ砂漠が広がっていくんだ・・・」

「もしそうだとしてもなあナーノ。」

「そ、あんたはまだ生きてる！」

「・・・」

「ほら、バスコーにおぶされ。手を離すなよ。いくぞ！！」
3つの影がひとつになってぐずぐずに崩れていく地表を駆けていった。

精霊王は解放された。

キリーク王国は一夜にして崩壊した。いや、キリークだけではない。キリークで発生した異常気象はたちまち周辺諸国を襲い、全世界が荒れた。

ナーノはノサツポへと戻ってきたが、ひどい日照りが20日も続き地に緑はなかった。

「ディー様を村から出したのが間違いだったなあ・・・」
村長は何かにつけそうつぶやく。

村の中には土地に見切りをつけ出てゆく若者が出てきた。手入れさ

れない田畑は荒れ、害虫が発生していった。

それは何もノサツポだけではない。人は飢えに追われるように地上を徘徊し、どこかに留まり、どこかへと流れた。

第十六章（後書き）

あらすじ：

バリスはソフィアの後を追い聖源室でついに彼女を討った

しかしソフィアはエルまでたどり着き、ついに精霊王はシールドから自由になった。

精霊王エルは解放されたがこの100年の間に衰弱し、精霊達は道理を失って暴走し、その結果もたらされた天災はキリーク王国に留まらず全世界を蹂躪した。

第十七章（前書き）

えゝ・・・

エネルギー問題をいろいろ聞かされて嫌になってる人は後半からスルーしたほうが良いかと思えます。

後書きにこの章のあらすじを書いておきます。

一八章は普通にファンタジーします！

第十七章

「バスコー！めしだぞー！ー！」

「やつとか・・・腹がねじ切れそうだ。どれ。」

「・・・どう？」

「どつて？うまいよ」

じー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！
ふむ？

「・・・そうか。良かった。」

「あ、もしや、テメー！俺を毒見に使ったな！？」

「考えすぎだよ。バスコー。」

「いや、おまえはそーゆー奴だ！」

「人聞きの悪い」

川原で名もない雑草といやに色が鮮やかな虫の煮込みを食べる男2人。

かつて滔々と流れていた清流は今は枯れ果てて、雨が降った時のみかつての名残を見せる。

「コザガラいると思うか？」

「いる」

「根拠は？」

「山の精霊はそこから離れない」

「ではちよつと質問変えようか。コザガラは生きていると思うか？」

「・・・生きるの定義は？」

「うっ・・・意思がある、かな？」

「死んでるかもなあ・・・そうになると精霊の死の定義は意思がなくなる？」

「いや、死んでいるとしたら、草も木もないだろう。と、すると。

生きるの定義は・・・生きているものがあるという事かな・・・」

「バスコー。お前、それ言語的におかしいだろ。」

そのまま川沿いに上流まで歩き、やがて陽が落ちた。川原の石は土に半分埋もれ凹凸が激しい場所ばかり。巨大でなめらかな岩の上にテントを張った2人は仰向けになって空を見上げた。

彼らは相変わらずコザガラ探求の旅をしていたのだ。

「ナーノは精霊王だったのかな？いや、ちょっと違うか。宰相ぐらい？」

「どつちにしろ精霊とは違うだろ。もしそうならエネルギー源として狙われるはずだ」

「それは論理のすり替え。狙われるのとナーノが精霊だというのはイコールじゃないし」

「いや、案外そういう事で闇組織にでもさらわれたのかもしれない。」

「そうなる・・・探し出せないな。」

ナーノはノサツポに一度戻ったものの1年も経たずに村を出たという。

バスコーは川原から拾った小石を目の前で透かすように見つめてため息をついた。

「この小さな石の精霊に行方を訊いても駄目かな」

「相手が強い精霊じゃ、市井のちっちゃい精霊なんて知らないんじゃないの？というか、そもそも人間の俺たちと会話できないんじゃないかねえの？」

「コザガラだったら知っているだろうに・・・」

その夜、2人は夢を見た。

2人が眠る巨石が川原から離れ宙を飛ぶ夢を。

上から夜の地上を見るとあちこちに小さな光が見えた。

騒乱の炎ではない。それはささやかな暮らしの明かり。

それはかつての夜を欺く狂乱のネオンと光の渦を知る者としては余りにもささやかなものだった。が、今はそれが地上にあると知り心の底からうれしさがこみ上げ、2人の頬に涙が流れ落ちた。

朝、目が覚めても2人は無言のままテントをかたづけ予定の山道を登っていった。

小一時間も歩いただろうか、ハリーがぼつりとつぶやいた。

「バスコー・・・夢見た？」

「ああ」

「俺達、希望持っていていいんだろうか」

「ああ」

「そっか」

ただそれだけの会話だった。

3時間後

もつと登ろうと予定していた山道は深い笹藪の中に埋もれていた。

もはや誰も手入れしない山道。

誰も登らない霊山。

精霊王エルの解放と共に地上を蹂躪した天災のあまりの激しさに、人は自然をむやみに恐れるようになった。自然を愛でる事すら自分の原罪とばかりに、山奥や秘境はもちろん近くにある森林にさえ踏み入る事をやめた。

その為の道を、今後登るであろう人の為に維持してあげようという気力はもはや無くなってしまったのだ。

そればかりではない。

自然を生活に取り入れ自然と共に生きる事すら後々報復を受けるのではないかと・・・そう。

精霊王エルを一つの所に閉じ込めその力をエネルギーにしたキリークの傲慢。

その轍を自分が踏むのではないかと恐れ、巨大エネルギー創出への探求をやめた。

たとえそれが出来てもやらないでいこうという風潮が蔓延したのだ。全世界的なその流れに工業は軒並みその技術を錆付かせた。

ささやかな電力事業が雨後の筍のように地にあふれ、それを使用できざる者と出来ない者の差が現れた。

特に顕著に差が出たのは情報端末で、一部の特権階級だけが使えるようになり真の情報はベールの奥に隠された。

出処のあやふやなニュースを街角のテレビが騒ぎ立てればそれを検証できない市民は言われるままに右に左に踊った。

それをまたニュースが取り上げ虚実に事実がコーティングされていた。

第十七章（後書き）

あらすじ：

久々にコザガラ探してシャル溪谷まできたバスコーとハリー。

そこで巨大岩の上にテントを張り一泊することにした。

その夜、荒廃したと思われた地上にささやかな暮らしが始まりつつある夢を2人同時に見た。

次の日コザガラがいる霊山に登ろうとしたが結局かなわず旅は終わった。

第十八章

さて。

そんな中、画期的なおもちゃが発売された。

「精霊と会話しちゃおうノコミュ エル」

一見小さな拡声器である。会話したいものに専用のピタッとシールを付けその先にあるイヤホンを自分の耳に。そして特製拡声器を向けて話しかけるのだ。

すると、石でも草でも話をしてくれるという。

最初に買ったのは・・・大人たちだった。

子供時代に沢山のおもちゃに取り囲まれ、高度な文明の中で育った大人たち。

面白いものには無意識に飛びつくという習慣がまだ失われていなかったのだろう。

そして、このおもちゃが非常に性能が良かったため爆発的に売れた。

例えば、拾ってきた小石におもちゃを試してみたら、自分はこの土地の出じゃなく隣の県の ×山から来ましたと答えたという。そして、エル開放の時には自分も怖かった。でも今はみんな落ち着いてきているから心配するなど励まされたとか。

また庭の草に話しかけてみたら、明日からしばらく雷雨が続くから用事があるなら今日中にやれとまで教えてくれたという。

会話の中で出てくる天気の前言は特の中率が高かったので、それも相まってヒット商品となったのだ。

「社長。お茶をどうぞ」

「ああ」

社長室で事務机に座りながらお茶を飲む男が一人・・・ハリーだ。社長室といつても8?ほど。社長の机の前に応接間セットという名の丸テーブルと簡易椅子が置いている。

爆発的売れ行きのコミュ エルであるが社屋は貧相のまま、ただ工場だけが設備改善・投資されていた。そして今、自主発電装置を敷地にぶち立て安定した電圧で100%まかなっている。

そのシステムの基礎となっているのはアルシュ王国の古い文献にある天然ガス利用方を基にしたものだ。

かつて”ユリカゴ”ではエルから流れ出てくる雷による放電を自在に操り、安定した電気エネルギーを全世界に供給していた。その莫大なエネルギーから見るとほんのすずめの涙ではあるが今の設備には十分なものだった。

机の上の電話が鳴った。外線から直接つながったようだ。

「おう！バスコー！そっちはどうだ？」

ハリー社長はでかい声で話す。

今、バスコーは”自然に学ぼう”ツアー企画のためかつてのキリク王国に来ていた。そこにはぐんにやりとひん曲がった中央塔の姿。将来への警告のためとか何とかで、撤去されないまま歪んだ姿を晒している。

つまりは撤去作業の費用も技術も無いのだ。

「あー。とっても良い保存状態だよ。今、王宮の入り口だけどひどい有様だ。」

「え？掃除とかしてないの？」

「埃や塵はさすがに無いけど建物のヒビはそのままだ。」

「それを残しておくことに意義あんのかね？」

「まあ・・・台風が10回も来れば確実に崩れるね。」

「結局あの大爆発でも王宮は吹き飛ばなかつたんだもんなあ・・・」

感慨深げなハリーの声が受話器から漏れた。

「エルの思し召しかね。」

「んにゃ。とにかく早くそこから遠ざかりたかったんだろ。」

「そりゃそうだ・・・で、ツアーにここを組み込むのは無理だ。来るまでの道がづらい。」

バスコーには珍しく嘆くような声。

「つらい？デコボコすぎて乗り物酔いしそうなのか？」

「違う。あまりに文明臭が残りすぎて。爆発前を知らない奴なら何も感じないかもしれないけどね・・・つらくて見てられないよ・・・あの壮麗で華やかだった王宮通りが人っ子一人いない廃墟だ。」

「そうか...ま、我々もDSじゃないから、そういう事なら首都めぐりのルートは却下ね。早くこっちに戻ってきな。今日、浜の漁師さんからアマイカ2ハイもらったんだ。」

「なんつ・・・！そっちに帰る頃には無くなってるだろ！それ！」

「予定は・・・あつ10日後だったね。とつとく？」

「いらんわ！」

「で、コミユエルの結果はどうだったんだ？」

ハリーの声がシリラスになる。

ツアー企画下見は二の次で本来の目的は、エルが閉じ込められていた塔と王宮でその場にある自然のものに宿る精霊と会話する為だった。

「言葉として捨つのがかなりむずかしい。泣き声ばかりだよ・・・見捨てられたと言っている。」

「・・・わかった。」

その後は、霊山と聖地の話に移り無事に帰るようにとお決まりの文句で電話が切れた。

久々にコザガラ探しに出掛けたあの日。

彼らはコザガラに会うことはついには出来なかった。

だが、帰宅途中であることに気がついたのだ。

『俺たち2人ともあの巨大な岩に出会ったじゃないか！』と。

2人は後日装備を整えて再び巨大岩に会いに行った。そして、会話とも言えないが意思の疎通ぐらいは出来ると確信したのだ。

それとは別に気象 チガイの友人から天候に関する膨大な資料をもらい、異常気象後の天候変動予測システムをインプットした簡単なチップセットを作り出した。

それらを組み合わせて出来たのがコミュ エルである。

第十九章

身体があるというのは、はなはだ煩わしい事よ・・・

エルは手にした白い布きれをもてあそびながら思う。

この思考するという行為もこの身体にひきずられての行為。

どうすればこの肉体から解放されるのか・・・

あの人間、ナーノにもう一度会いたい。

我と同じ肉体がこのよどむ状況に変化をもたらしってくれるはずだ。

どうしたことが、どこに居るのがわからない。

わからない・・・

ルーパスからハリーに連絡し終えたバスコーは、宮殿の入り口に張り巡らされたバリケードを眺めた。

『入れないな。こりゃ。』

今度何時来るか判らない。あまり居心地の良いものじゃないがきちり見ておきたい。

バスコーは宮殿の横に回って高い塀が延々と続く道を歩いてみることにした。

多分この季節であればそこには緑が生い茂り花が咲き乱れていた事だろう・・・

ああ・・・つらい！

この想像力は邪魔だ！

もともとこうだと思っ込め！

・・・・・・・・・・・・・・・・おんや？

これはこれは・・・壁が崩れていらっしやるじゃないか。しかも大きな亀裂あり。

俺でもいける！

崩れた外壁にはロープが張っていたがそんなものは目に入らなかつた・・・事にして、バスコーはずんずん中に入っていった。

外壁はもちろん宮殿の壁まで大きく穴が開き、銀色の破片が地面のあちこちで光っていた。どうやらユリカゴの外壁が落下して直撃したのだらう。

宮殿の中に入ると、バスコーは荷物の中から懐中電灯を取り出した。カツツ・・・カツツ・・・カツツカツツカツツカツツカツツカツツ靴音がやけに耳に付く。いつそタップでも踏んでやろうかと思いつながらバスコーは北の廊下を歩いていった。

一つの扉を開くとそこは通路の交差空間らしく、正面と右へそれぞれ階段が降りている。

右に進むとやがて庭に出た。

全ての花は枯れ果ててその上にユリカゴの残骸が突き刺さっていた。なんとという寒々とした芸術作品だらう・・・バスコーは荷物の中に仕込んだカメラでこっそり撮影した。

もう一度交差地点に戻り別の階段を下りてみる。

そこは使用人専用の裏廊下らしく、壁の造りも簡素で実用性重視とありあり判る。

バスコーは手近にあったドアを開けてみた。小さな食堂である。

次のドアは？うーん・・・庭への抜け道と見た。

お次は何だ？次は？今度は？

バスコーは次々と開け、あるドアを開けて固まった。

そこは謁見の間だった。

バスコーはしばらく入るか入るまいか思案した・・・が、何も考えずに行こう!と考えドアの中に入っていった。

床を赤に染めた近衛兵達の死体も、壮絶な死を迎えた王の亡骸もすでに部屋には残っていない。ただ・・・碎けた王座だけがあの時のままだった。

バスコーは王座に向かい身を正し喪の礼をした。

バスコーは、自分が12才の頃にテレビで見たソフィアとヴァレリオの壮麗な結婚式の様子をふと思い出した。

どちらも王の血を継ぐものとしての威厳をたたえ、若さと気品に満ちていた・・・このような最期を迎えると誰が想像しただろうか。

バスコーは流れそうになる涙をこらえようと天井を見上げた。

「!!」

腰が 抜け ました・・・

何も 考え られ ませ ん・・・

天井にはナーノの死体があった。

第二十章

バスコーは柄にも無く気絶してしまっただらしい。

すぐに覚醒し、上を見ないよう這うように謁見の間を出るとエントランスルームまで続く長い廊下に出た。

そこは窓に板が張られているものの漏れた陽の光が床に柔らかな明るさをもたらしバスコーを冷静にさせた。

・・・どうする？

心臓がバクバクしている。軽いショックでも死ねそうだ。

だが脳は、いろいろ知りたいから引き返せと言っている・・・

・・・ま、俺って心臓強いし。

バスコーはもう一度謁見の間にもどった。

天井に懐中電灯を向けると確かに子供の身体が天井に張り付いている。

庶民のような服を着て下に向かって恐怖の表情をつかべたまま天井に張り付いている。

・・・だが、それはどう見てもリアルなだけの石像だった。

強いて言えばナーノに似ているといえるが・・・

ふいふい・・・長いため息をつくバスコー。

・・・焦って損した。

バスコーは荷物の中からコミュ エルを出してシールはそのままにイヤフォンと拡声器を使って話しかけてみる。

「もしもし？ナーノ？」

・・・反応なし。うんうん。そうだろうよ。

バスコーはついではかりに謁見の間にある石ころや布を片っ端か

らコミュ エルにかけてみた。
やはり嘆きの声ばかりである。
そして、これを最後にしようとして決めてピタッとシールを砕けた王座に張り付けた。

「こんにちは。僕の声が聞えますか？」

「……………」

雑音が多い。コミュエルに付いているチューニングをいじってみる。

「もしもし？」

「ガガガ……グウ……ウウウウ」

あつ？ えっ!？

バスコーは瞬間的に王座から跳び退った。

コミュエルのシールはそのままにイヤフォンは耳から抜けて玉座に当たりカツンと軽い音を響かせた。

と、玉座の周りがぼやけて見える。細かい砂埃が玉座を取り巻き、床が細かくゆれている。

椅子に取り残されたコミュエルのイヤフォンが跳ねた形で石になっていた。

石化の力。

強力な地の精霊がここにいたのだ。だからあのバリケードだったのか！

では頭上にある子供の石像は……

突然バスコーは玉座のほうに走り出した。そこはもう砂が天井まで舞い上がり向こう側が見えない状態だったにも関わらず……だが、バスコーは自分の勘を信じた。

ボタン!!

勢い良く木製のドアが開いてバスコーは質素な木造の廊下に転がり出た。

後ろの謁見室で何か天井から落ちたような派手な音がして思わず「ナーノ！」と、叫んだが、勿論助けに行く事など出来はしない。バスコーは猛烈な勢いで廊下を駆け抜けた。

他より床下が一段高い北の廊下に入ると足元から立ち上がる妖気が弱まった気がした。

少し余裕ができたので歩調を緩めて壁の裂け目に向かう。まずい状況だ。生きて帰れる気がしない。

ハリーに繋がるかどうか確かめべく長距離レシーバーをオンにしてみる。

中継機材を積んだ車とは距離があるがどうだろう……

「もしもし」

反応は無い。

レシーバー片手に壁の割れ目からようやく宮殿の外に出た……とたにヒュンと風が駆け抜けた。

「うお！」

咄嗟に壁にピタツと張り付くとつむじ風が ヒュルン ヒュルンと駆け抜けて行く。

姿勢はそのまま目を風上に向けてみれば風の壁が向こうからやってくるのが見えた。

すぐに壁の割れ目に戻ろうとしたが壁にかけた手が急にガクンと抵抗した。

見ると左手が石となって壁に同化している……ぞつとして右手の力が抜け……

手にあつたレシーバーが地に落ちてバシツという音と共に青い光を放った。

ありえない……が、バチバチと放電し続けている。……精霊!? 左手の石化で壁に貼り付けられたまま、風の壁が近くまで来た時、

バスコーは己の手首が砕け、手だけがここに残る様を想像し恐怖のあまり絶叫した。

「たすけてくれー！コザガラ様ー！！！」

耳がキーンと鳴り体中に稲妻が走った。

身体が激風に飛ばされ宙に舞い左手に激痛が走った。

もしバスコーに精霊が見えたなら、自分が強大な風の精霊・地の精霊・そして雷の精霊に取り囲まれていることに戦慄しただろう。

この精霊たちは他とは違う特徴を持っていた。

それは精霊王の身体から抽出され人為的处理で作り出されたエネルギーのよどみ・・・言ってみれば自然界の精霊と人工操作のコラボレーションで創造された異端の精霊だった。

それがあの日、ユリカゴの制御から開放され、もちろん精霊王エルの制止など訊く筈も無く、パーシブをはじめキリークをその周辺諸国を全ての精霊を巻き込みながら蹂躪していったのだ。しかし結局自然界のどこにも居場所はなかった。最高テクノロジーの残骸の中や建物の中・・・とりわけキリークの宮殿内には強大な精霊達が淀むように棲み付いたのだ。

宙に持ち上げられたバスコーは急に失速し地面に落ちていくのを感じた。

しかも地面は波立ちそこから水晶のように鋭い突起物が突き出て来るのが見えてしまった。

「ぎゃああああああああ」

「？」

バスコーが目覚めると、そこは美しい森の中だった。

空には白い雲がゆっくりと流れ、地面には丈の短い草や花が咲いている。

周りには緑したたる灌木がサワサワと優しい音をたて、遠くから小鳥の鳴き声がかすかに聞えた。

あー・・・死後の世界か。

呆気ない幕切れだった俺・・・ああ左手、こんなになっちゃって・・・死んだ後でもなんとなく痛みがあるのはまだ死んだばかりだからだろう。

ハリー、俺の遺体を捜しにあそこになんか行かないでくれるといいんだが。

バスコーは立ち上がると以前読んだ“死後の心得”という本を思い出していた。

あの中では確かそのうちお出迎えの人が来るとか書いてあったような。

その前に自力で川を探してその上流に向かわなきゃいけなかったかな？

バスコーは近くの小川をたどってやがて大きな川にたどり着いた。

「あれ？ここ・・・」

川に出て視界が開け遠くの山が見通せた。

見覚えがあるぞ・・・というかあれはトンガリ山？ここシャルル溪谷の下流じゃないか！！

川の水がジャバツとはねた。

水量がもとに戻っている証拠だ。よかったなあ・・・と思ったつかの間。川の水が噴水のように立ち上がり人の形を作り出した。

精霊！！

バスコーは逃げ出そうとしたが「コザガラの使用ですが！」といわれて立ち止まった。

使いは使いだけだったようで、とにかく渓谷まで行くよう指示だけすると、また川の流れに戻っていった。

えー俺、重傷者なのにい？（見た目ほど痛くないが）

バスコーは片手でヒイヒイいいながら夜になる前に見覚えのある場所 以前出会った巨大岩までたどり着きホツとして小休止・・・もとい爆睡してしまった。

濃藍が空を覆い、満月がおぼろに天空を照らしている。

バスコーは人の声で目を覚ました。

大勢の声が聞こえた気がしたが近くに居るのは2人。

一人は老人もう一人は青年。

なぜかどちらも見覚えがある・・・老人はコザガラだがその対面に座っている人物は誰だろう？年の頃なら16・7か。かんたんな口トプを着ているが月光に映し出された顔は高貴にして秀麗。

この年の子で知合いは聖骸録関係しかいない。だがこんな貴族顔の奴なんかいないし・・・こいつ誰だ？

バスコーはゆっくり近づき、2人に挨拶をした。

どちらも目礼を返しただけで再び2人で会話しだした。

しかたがないので2人の近くに佇むバスコー。

大勢が話しているように聞こえたわけだ。2人の口からはまったく別の人間の言葉が次々に出てくる。

まるでラジオだ・・・こんな事が出来る時点で人じゃない。
そもそもコザガラの方が少し控え気味に見えるんだが・・・あっ！
ようやくバスコーはその青年が誰か判った。

妖精王エル・・・！

第二十一章

そりゃ見たことあるわけだ。

我らがヴァレリオ王とソフィア王妃の御子。

もつと正確に言うつとこの2人の間に出来た御子に乗り移っている精霊王エル。

美しくない訳がない。

ナーノも成長すればこうなるのか・・・だがナーノは死んだ。石と成って・・・

バスコーは自分の左手をしみじみと眺めた。

肘の関節から前腕の中央までは肉体のままだが、その先は徐々に肌色の大理石になっている。そして手首の下で砕けてその先からは無い。

断面は赤と白と肌色の小さな結晶がザキザキと突き出ているのだ。

『生活に窮した時には見世物小屋でアルバイトでもいけるレベルだなあこりゃ。』

どこまでいっても陰鬱とは無縁のバスコーであった。

さて。

目の前で複雑な会話が続く中、時々ナーノという言葉が出てくる。使われている言葉は外国の言葉かと思っただがどうも古語のようだ。

ちよつと言葉が途切れた時にバスコーは思い切つて声をかけてみた。

「ナーノの死体はどうなつたんでしようか？」

2人がこちらを振り向いた

「ナーノの何だと？」

「死体を・・・といつても石化していて石像になっていましたが。」

「それはどこで見た。」

「キリークの宮殿内の謁見の間です。天井に横たわっていたんですがどうやら落下したようです。」

「そうか。」
それから2人の 他の者を交えずコザガラとエルが話し合いを始めた。

表情には出さないがエルはバスコーからの情報に喜んだ。

エルはずっとナーノを探していたがようやくその居所が今わかったのだ。

キリーク宮殿・謁見の間。

爆発の時にユリカゴから解放された無軌道な精霊達の抛り所。

ようやく解放されたエルとしてはキリークの宮殿を中心にルーパスを詳しく調べる気にはならず放置していた。

爆発により街が破壊されその後の精霊達の暴走後、エネルギーを使いすぎた精霊は消滅・衰弱した。

そんな精霊達の声がエルまで届くことはなかった。

自分が知らない強力な精霊達がどうやら宮殿にいるらしい。

トクツ・・・トクツ・・・トクツ・・・トクツ・・・トクツ・・・

心臓の音が聞こえる。

生きている音だ・・・

トクツ・・・トクツ・・・

さあ・・・逃げなくちゃ・・・

あれ？

目が・・・開かない？

ナーノは床に倒れたまま思考を巡らせた。

ノサツポの地を離れて当てもなくさまよい、何度も夢に現れるソフィアの死にざまに飛び起き、結局自分はただの孤児なんだと自棄になりかけた時、無性にソフィアの痕跡を見たくなった。

アルシユ王国のエズバラン卿に手紙を出し国王にお伺いを立ててもらったが王宮深くに立てられたソフィア専用の館に一平民を入れさせもらえる訳がない。

そこでキリークの宮殿の中を見ようと思い立った。

ソフィアが居た痕跡があるかどうかさえ考えず藁にもすがる思いで首都ルーパスまできたのだ。

そして最初に訪れたのが謁見の間。

ところが入って玉座に近づいた途端、突然床が波立った。

逃げようとしたが鉄と銀の扉は開かず、地から足を離さなくてはと玉座に上りかけたところ下からの疾風で天井に叩きつけられ……

今、床にうつぶせで倒れている。

部屋いっぱいに満ちていた精霊の気配がいつさい消えてしまっている。

身体が重いのは何メートルもある天井から落ちてきたせいだろうか？

しかしどこにも痛さはない……腕や足はもちろん瞼さえ動かす事が出来ないだけだ。

これじゃ床に縫い付けられた標本じゃないか！

いくら頑張っても身じろぎひとつ出来ないナーノはやけになりふてくされた。

床にうつぶせ状態のナーノは自分の身体が石化している事に気が付かない。

そして自分のうなじに小さな電極が付けられ規則正しいパルスを発

している事を。

その材料は王座に残されたコミュニエルの一部。

今までばらばらにうごめいていた宮殿内の大精霊達が今や一つとなり、ナーノを自分達の王に・・・精霊王にすべくその体に干渉した。

火が石を溶かし金属を合わせ水と風が温度と圧力を整えその合金はナーノの体に入り込みそこに電流が流れて行く・・・

「正確に！確実に！時間通りに！」

ユリカゴのどこかで聞いていた人間の言葉が何故か彼らをせきたてていた。

第二十二章

宮殿で大精霊に囚われたナーノの話聞き、精霊王エルは再度首都ルーパスへ行くことに決めた。

呪われしあのヴァーウエンめが我力を利用して建てたあの城へ！

バスコーはエルに策があるのかと尋ねたが、何も答えない。

精霊の信条“為るがままで在れ”では絶対に負けると何度も言ったがどう受け止められたかさえその表情からは解らなかった。

バスコー自身の記憶を総動員して聖骸霊録を始め今まで読んだ書物に、今回のような大精霊と戦うなどという例があったか考えたが、残念ながら記憶に無かった。

では

精霊王が負けたという話は？

その記録は残されている。

やはり人が作った妖都ブルーシアン。そのブルーシアンの守り主ゲロードンという人造怪物に負けて、頭は空へ腕は雲へ脚は木へ足は山へと四散した。

その日の夜から星の位置も日の出の時間もがらりと変わり、世界的に異常気象が起きたという。それらしい大異変の痕跡が2億年前の地層から出ていて、大量の生物絶滅が確認されている。

負けというより相打ちだ。

もちろん聖骸霊録研究者のはしくれでもあるので当事者のエルにその時のことを聞いたが「知る必要はない。」と、取り付く島もない。だが、精霊王がいなくなれば天変地異どころではすまなさそうだ。非常に困る。

正直、俺が生きてるうちにはそれを目にしたくはないなあ・・・と、バスコーは溜息をついた。

エルはバスコーと共に山を降りてきた。

肉体があるとはいえエルの身軽さは尋常ではなく、何も言われないまま手を取られ崖から眼下の山道に飛び降りた時は「無理十心中」の4文字がバスコーの頭の中を駆け抜けた。

地面に激突する前にエルが軽く・・・こぼれ落ちそうな花びらに手をかざすような手つきで受け止めてくれたが、腰を抜かしたバスコーはしばらく動けなかった。

そんな調子で渓谷から里までほぼ一直線で・・・2日かかる山道をたった20時間で降りてきた。エルだけなら半日で来たかもしれない。

コザガラ関係のおかげで山登りは自信があったバスコーもさすがに目が回り、里についてハリーに電話を入れベンチに座ったと勝手に疲れで立てなくなった。

「こうした方が楽だろう。」

エルが席を譲ってくれて横たわるようにうながした。とてもありがたいがその心遣いはどこで身につけたんだろう。

よく考えれば年齢は13歳くらいじゃないか？

下から見上げる精霊王はどう見ても青年。宮殿の天井に居たナーノは少年だった。

こんなに年の差があったのだろうか？肉体の成長速度が違うのか？

「貴方は疲れないのですか？」

「この身体は人として常に健康体に保たれるらしい。」

「無意識に？」

「ええ。」

「うらやましい……」

「そうかな？なかなか難しいぞ。」

「そうですか？」

「この肉体から解放されるべく考えうる事をやってみたが、結局無駄に終わった……」

「え？肉体から解放されるとは……？」

「ああ、少しでも早くこの肉体から出ねばならないのだがなかなかうまく行かない。滝つぼの中で一日水づけでいたこともあった。アリア山の火口に落ち全身焼いてもみた。人に頼んで首を落としてももらった。しかし、滅と生が同時に起こるだけ……わずかに老化したのみでこの肉体はなかなか朽ちぬ。」

「……」

な、なんだ？なんだこいつは？俺が手を引かれていた相手は不死身でしかも自殺願望者か？身体を愛しむ事の無い奴だったのか。そりゃ崖から落ちるし水に沈むものにも躊躇しないはずだ。

よく生きてたなあおいら……。と、ますますぐったりしたバスコ
ーにエルの顔が近づく。

「なんでしようか？」

「おまえはコザガラに気に入られている。」

「えっそうなんですか？」嬉しいことを言ってくれるじゃないか！
いい奴じゃないか。

顔は気に食わないけど。

「ゆっくり休め。我はこのものと話をしてくる。」

エルが額をなでるとバスコーは深い眠りに落ちていった。

バスコーは人の話し声で目がさめた。
もう使われなくなったバス停のベンチは、屋根があるという事で休み処になっている。

縦に長いバスコーを邪魔そうにしている女の子3人分の声が非常にかましい。

「私はそこに立っていたただけなのよ？」

「うん！わかってっからその先言って！」

「じらさないで早く！」

「んじゃっ、その人がね三叉路のところから山の道に入ってたのよ。」

「うん」

「そしたら山がいきなりどかーんって！」

「！」聞いていたバスコーがびっくりした。あいつの話に違いない。

「あ、それがか〜！」

「なんであそこに貴族様がいるかと思っただけど。」

「温泉が出た時に偶然通りがかったみたい。すごいびっくりして動かなかったもん」

『それびっくりしてませんって』

「人が集まってくる前にどこかに行っちゃった。」

「すごい美形だったんでしょ！」

「どこかの王子みたいだったって聞いた。」

『1111の国です』

「！」
「！」
「！」

???

静かだ・・・何故？

ひんやりとした指が額に触れ、全てを悟ってバスコーは目を開け起き上がった。

噂の王子様がいた。

「ハリーが来たんですね？」
無言でうなづくエル。

バスコーは急いで立ち上がり急ぎ足で歩き出したが、ふとエルを見ると女子学生の固まりを見つめて立っていた。もちろん女子学生もエルを熱く見つめている。まずい！

「さあ。見世物じゃないんだから行くぞ！」
どちらへというともなしに怒鳴ると、エルの手を取り強引にその場から離れた。

すると1分も歩かないうちにハリーの車が近づいてくるのが見えた。

「バスコー！」

車を傍らに止めると転げ出るようにバスコーが降りてきた。

半分安堵し半分激怒の真つ赤な顔でバスコーの元に突進してきたかと思うとおもむろに左手を取った。

「おまえ！これどうしたんだ！？大怪我しやがって！あれ？えっ？これってまさか精霊にやられたのか！？」と質したが、バスコーが

答える前に

「痛そうだが大丈夫か？いや、そうでもないか。ここから先は感覚無しか？」と、コンコンと軽く大理石を叩く。

「俺もいろいろ見たけどこんなすごい初めてだ。これ重くないか？左手にトレーニング用の鉄輪つけてるようなものだ。断面で結晶化かあ、こう言っちゃ何だが綺麗な仕上がりだ。かなり上級の精霊だな……あ、バスコー？」

思考が一区切り付いたようですよやくバスコーの顔を見るハリー。「ん？」

「義手要る？要るよな。これなら。ちよつと義手屋に電話して予約入れてくる！」

「まてい！ハリー！！！」

いいかげん隣に立ってる奴に気づけよ！と心の中で毒づきエルを示す。

ハリーは、ああ、と気が付いたような表情でエルに一礼した。

「はじめまして。コミュエル製作所のハリー・クロノティと申します。すいませんが、取り込んでおりますので後ほど改めてご挨拶させていただきます。」

流れるようにそれだけ言うときびすを返した。

「ハリー！エル様だぞ！！！」

「……きびすを返したその姿勢でふたたび180度反転したハリー。」

「え？」

「顔見りやわかるだろ。」

「……ああ……本当に……」

「お母様のソフィア様に似ていらっしやる。」

「……」

エルの無言が痛い……バスコーは場の空気を変えるように大きめな声で目的を伝える。

「キリークの宮殿に行く予定だ。詳しくは車内で話す。」
「！・・・そういう事なら、こちらも宮殿からみで教えたいニユースがある。とにかく我家に行こう。」

3人は車に乗り込んだ。

第二十三章

ハリーは運転しながらバスコーが宮殿で精霊達に襲われた状況やそこにナーノが居たことを知った。

おぞましい話だ。ハリーの中ではナーノの身体はすでに砕け散り石の残骸になっていた。

また、精霊王エルの目下の問題：その身体からの解放についても聞かされたが、件の自殺まがいの肉体解脱法を聞かされると、車をいったん停止させ、

「その身体はあなたが両親からいただいたかけがえないものですよ！それを……。無茶苦茶しやがるのはやめて下さい！自分の身体を粗末に扱うなんてとんでもない。ソフィア様が草葉の陰で泣いていますよ。」と、懇々とエルに諭した。効果の程はわからないが、エルはじつと聞いている。

ここはルーパーズ中心部から60kmほど離れた位置にある農耕地帯。幹線道路から脇道にそれて程なくレンガ造りの瀟洒な家が見えてきた。

車はその駐車場へと吸い込まれていく。

バスコーも二度だけ来た事があるが物置小屋としか使っていないハリリーの別荘である。

中に入ると意外にきれいに片付いていた。

家にあふれていたコザガラを資料を大学に寄付したせいだろうか。大学は爆発と共に建物が崩れ、3年経った今も資料はがれきの中だった。

「適当に座ってくれ。」

客間は大きくはないが品の良さがそこそこに伺える。座るとすぐに一枚のFAX用紙を手渡された。

地元有志による新聞の記事と政府の広報が印刷されている。

宮殿の電力が回復した旨と、宮殿は相変わらず人が入れない状態なので近づかないようにとの警告と、それに絡んだ10件あまりの変死事件・・・

「2日前に来たFAXだ。最近夜になると煌々と電気が点くそうだ・・・昔のままに。どう？オカルトチックだろう？」

「・・・いるな。」

「精霊のいたずらか？」

「う・・・む。いたずらにしては仰々しい。意思を感じるね。」

「人を驚かそうとして？」

「そんな可愛らしい妖精みたいなものならいいんだけど。」

バスコーが左腕で丸テーブルの端をコツンと軽く叩いた。

「うっ・・・だな。」

好戦的で嗜虐的。そんな性格の大精霊達が宮殿の中で活動を始めたのだ。

部屋の向こうから蒸気音がピーと聞えた。

やかんが沸いた音にハリーが急いで出て行った。

「エル様？」

ずっと静かにしていたエルに目をやると、どうも顔色が悪い。

「車酔いですか？窓を開けましょうか？」

いいながら出窓を開けると風がさつと入ってきた。

それは部屋の中を軽くそよいで、エルの髪をふわりふわりと撫で上げながら精霊王にまわりついている。

精霊か・・・もうこの程度じゃ驚かん。

エルが手を上げその風にキスをすると風は一瞬乱れた後収まった。

バスコーは何か見てはいけないものを見てしまったようないたまれなさを感じ、まだ来ない扉の向こうのハリーに顔を向けた。

「これが今のところ宮殿関係でそろえられる資料です。工場に寄っていたければ最新情報を漁る事が出来ると思いますけどね。」
卓上にはまず宮殿内部の見取り図が置かれた。
ヴァレリオ王結婚の際、マスコミがすっぱ抜いた宮殿内部の見取り図なので精霊王を奉る大聖堂がやたら詳しく紹介されている。
素晴らしいことにその見取り図は宮殿の1階全ての部屋の位置を正確に描いていた。
使える。

それとは別に藁半紙のような粗悪な紙に手書きされた、その地下にある予備電力に関する簡単なレポートが2枚。
図解された炉は2つ。一つは火力であり一つは水風力である。
それがどちらも大容量蓄電池に接続可能な状態で、火、または水の供給源として使用できる他に逐電も可能となっている。
いずれもユリカゴが在るのが前提のシステムであり、宮殿内の電力・熱・水を10日間程供給出来るだけという代物である。
今はこれらが精霊の手中にあり、独自に機能出来るように改造されたのだろう。

もう一つ。こちらは情報だけだ。

宮殿から程近くにあるいくつかのホテルにぼつぼつと 集めれば100人程度の人間が滞在しているという。

それは爆発の直後に人が街を捨て、逃げられなかった者が自家発電機能を持っていたホテルに避難し、そのまま居ついたのかと思われた。
いや、当初はそのような人達にまぎれていたが3年経った今ではつきりと彼らの特徴が浮かび上がっている。

彼らはエネルギー関連技術者。全てユリカゴに関係していた者達だった。

「我、精霊王よ。おはようございます。」

窓に打たれた板は剥がされ朝の日差しが深く差し込む謁見の間。内装の崩れた壁は元通りに直され、床も塵一つ無くきれいに磨き上げられている。

だが部屋の上座に備え付けられた玉座は以前の惨状のまま大きく崩れている。

そして今、その玉座には足を組み両手を肘掛けに置いた少年とその前にひざまずく老人が一人・・・

少年は老人から挨拶を受けても一言も声を発することもなくただ人形のように座っている。

その顔はうりざねの上品な顔立ちだが、服装は妙にけばけばしく、緑と淡いオレンジの上質な毛織によるダブルジャケットに首元から赤レースがのぞいている。

レースで覆われた胸は呼吸をしている様子も無く、肌は血の気が引いたように白く、目は閉じたまま顔の表情も動かない。

しかもその髪は老人のように白く、後ろへと流されて背後に落ちる。

それが異端の精霊達の王、精霊王ナーノの姿だった。

彼は生きているのか死んでいるのか・・・

ナーノは玉座と同化してしまったかのように動かなかった。

方や、ひざまずく老人は白衣を着て弱々しく膝を折り新しい精霊王を崇めるような眼差しで見つめている。

ファーゴ・ナント・ウェルナル。

齢78の高齢ながらこの不自由な宮殿にもぐりこみ早2年目。

その人生をユリカゴにほとんどつき込んできたこの老人は爆発のその1週間後には宮殿地下に入り込みとある仕事に専念していた。

そして今、新たな精霊王を頂き、太陽が謁見の間に差込み始める頃になると必ずナーノの元へと朝の挨拶に訪れるのだ。

もちろんメンテナンスも兼ねて。

第二十四章

精霊はそもそも自然の中から湧き出るささやかな霊体でありその力はこの地上の天地自然の枠を超えることはない。

その長たる精霊王の力もまた、結局はこのささやかな霊体に寄るところであり、この星の安寧の為に膨大な数の小エネルギーを駆り集めて莫大なエネルギーと成し異常事態を収束させていた。

人の手に落ちた精霊王はこの非常時の力を常時出すように調整され管理された。

そして人はその膨大にして多彩なエネルギーを人工的な環境下に閉じ込めさらに増大させる事を思い立つ。

その環境とは、星の表面には存在しないマンツルの圧熱や宇宙空間の重力そして超低温。

この100年、その間に徐々にテクノロジは進化しここ近年ではさらにそれが加速され、その特殊環境の中にささやかならざる霊体を生み出し人々の暮らしを向上させた。

そしてキリーク110年目にしてエル解放。

それとともにその特殊環境も消えた。

外部に放り出された荒ぶる異端の精霊はあらゆる所に駆け回った。自らが今までどおり生きていける場所を探して。

そして人間もまた。

地上ではユリカゴの爆発を知った者達　　すぐにその現状を把握し、ユリカゴ内に勤務する者の総員死亡とエネルギー炉の喪失および原資である精霊王の遁走を把握した者達　　はすぐに行動を起こした。

今まで点検だけされて使われていなかった予備炉に火が灯る。

異端の精霊達はその身を自然界に飛び散らせ天を搔き地を削り海を焦がし消滅していった。

人間達が安全と言える炉を作る為に試運転を繰り返すうちに“それが、集まってきた。未だ異常なエネルギーを持つ大精霊の生き残り達が。”

エネルギー再創生の準備は着々と進んだ。

ただ、それにはどうしても必要不可欠な装置が欠けていた。精霊王エル。

この全精霊種を把握し協調させ分断し配合するシステムはどうしても開発できない。

もちろん大精霊のいずれもその役割を担うスキルが無い。

そんな時に代替品を発見した。

ナノである。

バスコーが拡声器で話しかけ、それに答えた事で研究員に気づかれたのだ。

こうして・・・人と自然の協調により大いなる未来を再構築する足がかり、第二のユリカゴが宮殿の地下で完成した。

「どうぞ。お隣のマウランさんからの差し入れです。お食べ下さい。」

夜まで続いた作戦会議は蓄電池を使いきり灯りが消えたところで一端途切れ、エルがハリーの言いなりに雷電を引いてきそうになり大混乱。近くの草原にでかい雷が落ちて収束した。

結局翌日早朝よりあらためて会議という事になり、只今次の日の朝である。

3人の前にエッグトーストとポイルポテトが乗った皿と淹れ立てのお茶が並ぶ。

「さてと・・・蓄電終了まであと1時間ありますからその間に食事して撤収準備ですね。工場に寄って完全充電させてもらってその間にもう一度知り合いに連絡入れます。」

「リック・ニイバーねえ。真面目を絵に描いたような奴だったよな・・・」

「そういう奴だった。俺の話真剣に聞いててこっちが恥ずかしくなるよ。」

「恥ずかしいならおちゃらけなきやいいのに。」

「それは？」

「ま、ハリーからおちゃらけ取ったれ何も残んねーけど」

「がるるるrrrr」

「いいから静かに食べよ。」

しばらく黙々と食べる3人・・・いや2人。

「・・・・・・・・・・・・・・・・エル様、お食べにならないんですか？」

うなづくエル。

よく考えれば昨日出されたお茶も口をつけることは無かった。

「やはりお口にあわないのでしょうか？」

エルはバスコーの方を向き、

「もし私がこれを美味と感じたらどうなるでしょう。」

そう一言言っただけ部屋を出て行った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・どういう意味？」

「さてね・・・要するに食べないって事だろ。2人で分けようぜ。」
うなづく1人分を2人で分け合いエルが置いていったナゾ賭けを頭の中で考える。

2人にとって目の前の精霊王エルは本意であろうが不本意であろうが肉体を持つている以上その為の食事は必要だろうと思う。そして彼がキリークの国王の忘れ形見である事も知っている。即位こそしていないがキリーク第5代王であり精霊王でもある。粗相がないように扱っているつもりだが、やはり何か失礼なことをしたのだろうか？

食事を終わると2人そろってエルを探しに外に出た。

「あそこだ」

1km程先の林が未だに朝もやがかかったままだった。

急いでそこに向かえば果たしてエルは霧に濡れたまま木株に座っていた。

「エル様。」

「お風邪をひきますよ。」

2人が声をかけると背を向けたまま

「私は精霊の長だ。」

「判っていますか・・・身体は人間でしょうか？」

「だから困るのだ。この身体の方と話すが良い。」

「？」

身体の方と話す？どゆこと？

「エル様？」

語りかけると向こうを向いていた身体がこちらを向いた。

「エルではない。」

金の髪に緑の瞳はエルのままだが、雰囲気がるで違う。

言ってみれば迫力が無くなりどこにでもいる普通に顔立ちのいい青年だ。

「では何とお呼びしましょうか？」

「・・・アルフィード。」

「わかりました、アルフィード様。私がバスコーでこちらがハリードです。」

「知っている。エルが知っていることをわたしも知ることが出来るから。」

「という事は・・・聖骸靈録とかも知ってるんですか！？ベルーシアンとか判ります？」

「まてっハリー！今は優先順位の高いほうから質問しよう。」

困り顔のアルフィードと空気の読めないハリーの間に割って入ったバスコー。

「アルフィード様、食事をしないでお体のほうは大丈夫ですか？」

「大丈夫です。ただ、調理した食事を食べることは禁じています。」

「禁じている？貴方の意思で？」

「うなづくアルフィード。」

「精霊王の為に。」

「なぜ？」

「それは・・・私に感覚があり感情があるからだ。」

何だか哲学くさくさくなってきた・・・やばいぞと警戒するハリー。

「五感と感情に振り回されるのは人の業みたいなもんだし、昔から哲学やら文学の命題みたいなもんですが・・・では、アルフィード様、あなたは精霊王に付き合わされて人が普通に食べている食事を拒否しているんですか？」

「ええ。」

「せっかく人の身でこの世にいるのに」

「おい、ちよい待ってっば・・・では何を食べているんです？それとも食べる必要は無いのでしょうか？」

「これです。」

アルフィードは何の躊躇も無く足元の土くれを掴んで口に入れようとした。

「わあああ!!」

思わずハリーがその手をつかんで止めさせたが、よく見ると彼の顔にはすでにうつすらと土がついていた。

手を離せばアルフィードは苦笑いしてその土くれをそのまま足元に落とした。

「川や雨で喉を潤し土や木で腹を満たす。劣情は風が慰め喜怒哀楽はこれが受け止めてくれる。精霊王に殉じるわたしが己に許しているのはここまでです。」

『!』

2人の目はアルフィードが取り出したものに釘付けになった。

アルフィードが手にした白い布はあの日のソフィアが着ていた純白のドレスの一部に間違いない。特徴のあるレースが無残に引きちぎられ冬の枯葉のように生地に張り付いている。

アルフィードはすぐにそれを懐に戻し、2人に向かい静かに質す。

「もし、川の水を汚濁と感じ雨風を厭うとしたら・・・わたしが感じるままにエルが感じ感情が芽生えたら世の中どうなると思いますか?」

それは・・・まずい。

人の感性では腐毒醜穢と思うものでも自然の中では重要な役割を担っているものである。

「わたしにかまわないで下さい。特に女せ」

アルフィードは突然口をつぐんだ。

特にじよせ?

そのままスツと立ち上がると、静かに土を踏みしめて2人の横をすり抜け山の小道を降りて行った・・・そこにアルフィードはいなかった。

山から家に帰って来たものの毒気をぬかれたような気分で2人は車に荷物を載せ出発の準備を終えた。

「お昼、どうしよう・・・新鮮な川の水でもさし出しゃいいんだろうか。さすがに水溜りじゃ不敬だよな？」

「お前の発想にや本当になくさめられるよ・・・」

ハリーの真剣な顔を見ながら頭を抱えつつ笑うバスコーに軽く蹴りを入れるとハリーはやけくそ気味に「さあ、乗ってくれ！」と怒鳴った。

一行はコミュニエル工場へと向かい走りだした。

第二十五章

ここはハリーの別荘から車で30分程走ったところにあるホロツトルという首都ルーパスに隣接する地域。

爆発後にこのあたりの住民は全て避難しその後もしばらく帰ってくる者はいなかった。

二束三文で売りに出された街外れの工場をそのままハリーが買い取った。

コムニエル工場は遠くからでもすぐに判る大きな自家発電塔を有している。

「あれがこのおもちゃの工場です・・・一応言っておきますがそれは壊れているわけではありませんから。」

妖精王の膝上にはコムニエルが乗っており、バスコーはエルがコムニエルを使って何かしらの会話が成立するものか実験しようとした。しかしいつもはペラペラ語る小石は精霊王の手の平で沈黙し静まり返っている。

「・・・」

気の毒なので小石をあずかりエルに「何か質問は？」と、訊けば「今はない」という。

では仕舞いましょうとエルの膝からコムニエルをどけようとするとしつかり握って離さない。どうやら気に入ってくれたようなので、ここは謹んで献上する事にした。

工場に入るとすぐに車はチャージ用ガレージに入れられ、3人は事務所に入ってしまった。

「社長、おはようございます。資料と写真はこちらのファイルにまとめてあります。」

事務所に入ると奥からケイガン嬢が現れファイルを2つハリーに渡

し・・・大きな目を尚大きくして固まっている。

エルを見ている。

エルもケイガン嬢を見つめている・・・

急にエルがケイガン嬢の身体を抱きよせた。

なんだ！？これがアルフィードが言っていたあれか！？と、思うより早くバスコーは2人を引き剥がしケイガン嬢の腕を掴むと奥の部屋に投げ込みドアを閉めた。

エルはただ立っているだけだが、不愉快とばかりに眉間に深いしわが寄っている。

「エル様・・・あなたですか？それともアルフィード様ですか？」

「話す必要はない。」

「アルフィード様と話をさせてください。」

「・・・」

エルは出て行った。

ハリーはファイルを掴んだまま何も言えずに成り行きを見ていたが、エルが出て行くとすぐに奥の部屋に入ってみた。

ケイガン嬢は頭を抱えて半狂乱になっていた。

舌を噛まないようにタオルを食ませ手足をロープで縛ったあと、ソファアの上に放置して部屋を出る。

「色情魔だな・・・エルは何をやるうとしたんだ？」

「想像ついてんなら訊くなよ・・・とにかくエルを掴まえよう。彼は山の中に置いて我々がナーノを連れて来たほうがいいんじゃないか？都会は彼には刺激が強い。」

「出来ない事を簡単に言うなよ・・・」

2人は話しながら事務所を出て操業中の工場に何とはなしに向かう。
「オカルト宮殿に入り込んでナーノの破片をかき集められるか？」
ハリーにとってはナーノは石像の破片でしかない。

「持ち上げるだけでも無理だよなあ・・・」

バスコーも頭の中にあるのはあの石像の子だ。

敷地内の車道上で2人は立ち止まる。

「分かれるか。俺、配送所に行くよ。」

「じゃ、俺はエジよ」

突然耳をつんざく大音響にバスコーの声はかき消された。

「!!!!!!」

「!!!!!!」

音はすごいが衝撃は少ない。

見れば発電塔の上半分が吹っ飛んでそこから黒煙がきのこ状に上がっている。

「エル!!!!!!」

バスコーは走りハリーは呆然と立ち尽くしたまま。

上からバラバラと破片が降ってくる中、バスコーがなりふりかまわず発電塔までたどり着けばはたしてそこにはエルが立っていた。

片手にコミュエルそして炉にシールが張り付き右手に拡声器。

エルは・・・精霊王エルは笑っていた。

バスコーはその笑いに絶対的な壁を感じた。

エル　　精霊王！

何を笑ってる!!!

地をさらう様に強く熱い風が吹きバスコーはよろめき倒れ、エルはその風に乗って塔を駆け上がって行く。

そのエルをバスコーは地に腹ばいながら横目で追う事しか出来ない。重い身体、風に打たれれば立つことも危うい。破壊された塔は高熱

をはらんで触れば火傷どころではないだろう。
人間はなんて弱いんだ。

エルはそれを越え全て従えて空へと駆けて行く。
俺は・・・何も出来ないのか・・・

地に巻いていた風が弱まり、バスコーが空を見上げるとエルの姿は
すでに見えず黒煙が千切れ雲の流れと共に空に長くたなびいていた。

風は黒線を拡散させながらキリークの宮殿上空を流れていった。

宮殿の地下には交代勤務で24時間稼働している発電炉があった。
それを調整する装置は謁見の間に置かれている。

謁見の間から外を見れば昔はさぞやみごとな庭園だったであろうと
思われる木々と枯れ草の葬列に銀もまぶしいユリカゴの残骸が突き
刺さっている。

そこに、コツツ・・・コツツ・・・と何かが当たった。

コツツコツツコツツパラパラパラザザ・・・何かの粒が空から
降っている。

だがそれは1分も経たない内に降り終わりあとはまた静かな宮殿に
戻った。

気づいた人間も精霊もそこに弱々しい雷雲のなりそこないを見つけ、
降ってきた霰にいぶかしんだ。

やがて、はるか東方で中クラスの発電炉が大爆発を起こしたとの報
を受け、その塵が上空に舞いそれがルーパス一帯にわか雨や雹を
降らせたようだと言われた。

その後の立ち直りはハリーの方が早かった。

バスコーが地面で腑抜けたようになっていて、怪我の有無だけ確認するとそのまま背負い建物の中に連れて行き、とって返して会社の敷地をあちこち駆け回りながら従業員の安否を確認し周辺住人に説明した。

その後大挙してやってきた保安関係者に適当な理由を繕って納得させ人が人を搬送し・・・あつという間に3日は過ぎた。

爆発した発電塔も手痛い損失だったがそれ以上に2人を深く悲しませたのは、あの巨大岩　　コミュエルを作ろうと思いついたあの夢を見せてくれた巨大岩　　が発電塔の中に投げ込まれ粉碎されていた事だった。

これは処刑なのだろう。

自分達がやっていた事は間違っていたんだろうか・・・？

自然と仲良くななどと思うのは人の慢心なのか？

・・・エル！答える！！

もちろん、彼らは知らない。

永遠に知る事は無い。

精霊王がこの一帯で一番大きいこの自家発電塔で何をしたか。

その日ルーパス一帯に降った雨や雹の中に、細微な塵と化したあの巨大岩があったことなど・・・

第二十六章

夜になるととたんに冷える。

ここは工場内にある宿舎。

社長はじめ重役は時に泊り込む事があるので専用の部屋を用意している。

ハリーはバスコーの部屋に入り円形ストーブに火の種を追加し敷石の上に置いた。

電灯は節約の為消しており、部屋を照らすのはその火だけ。火は水素を燃やし青白く灯っている。

それを見つめるバスコーは何やら難しい顔をして思案顔である。だが、実のところ頭の中は何も考えてなどいない。

あの日 エルが発電塔を爆破した日からバスコーはこんな調子だ。

「なーバスコー。この騒動で吹っ飛んじゃったけどお前の左手の義手作らないといけないな。」

「・・・」

「明日義手屋に連絡して来てもらおうよ。いいだろ？」

「このままでいいよ。」

ため息と一緒に口から漏れた言葉に張りは無い。

「あのさーそんな手じゃイザって時に困るだろ？」

「イザなんて時ないし。」

「ケイガン嬢に襲われそうになった時とか。」

「・・・」

バスコーの唇に馬鹿なことを言っただけでも言っような苦笑いが浮かんだ。

欠々に見たバスコーの表情にハリーは満面の笑みで明るい声を出し

た。

「手を作つてまた山に登ろうぜ。」

バスコーは顔を上げハリーを見た。

その唇はまだ笑みを残してはいたが大きく見開いた目は悲しみを湛え、ただ首を横に振った。

「じゃ・・・俺はそろそろ寝るよ。火だけ気をつけてくれ。」

ハリーはこの1週間、工場の事故処理に追われ寝られる時に眠り食べられる時に食事をする生活が続いていた。

深夜ではないまともな時間に眠る事が出来るのは事故後初めてになる。

「ああ。おやすみ」

「ああ。」

ハリーはバスコーの部屋から静かに自分の部屋へと帰つていった。

残された男の目の前では炎がゆらめいて部屋の中を仄暗い藍に染めた。

『まるで海の底だな・・・』

地上の命を産んだという原始の海もこうだったのだらうか。

水とマグマと雷と・・・原始の海で生まれた命はいつから意識が芽生えたのか。

最初は光を感じるだけの糸のような神経官を持った動物プランクトン。

いつの間にやらその先端がふくれ脳となり、周りを知り移動するようになり

やがて骨に沿つて髓に節が出来そこが・・・

腕組みしたまま火のゆらめきに気をとられていたバスコーははつと気がつき顔を上げるとドアの前に件のケイガン嬢が立っていた。

いつの間に部屋の中に？

出て行けと言おうとしたが、なぜかその気力も出てこない。

・・・それとも青い灯りを受けて佇むケイガン嬢がまるで海の精霊のように神秘的だったからだろうか。

長椅子に横たわるバスコーに気をかける様子も無く彼女はストーブに近寄り火にあたった。

彼女の影が壁に大きく影を作る・・・彼女が身動きするたびに影は大きく揺れ変形した。

宇宙の揺らぎだ・・・それとも全てを飲み込むブラックホールか。

影を見つめながらだんだん眠気に誘われていたバスコーにケイガン嬢が近づいてきた。

あれからずつと発狂状態の彼女とはまったく別人の女性がそこにいる。

彼の頬に彼女の手が添えられた。

それはストーブの熱を内包し冷たかった彼の頬に熱をもたらした。思わずその手に右手を添えると、彼女は少し微笑んだ。

そして、自然に・・・まるで春風に吹かれた花びらが静かに地面へと落ちてゆくように彼女の唇が彼の唇にゆっくりと近づいていった。

「えー・・・」

どうなってるのかわからないが、ケイガン嬢の狂気が収まったらしい。

久しぶりにゆっくり寝たハリーが身支度整え事務所に出るとすぐ後にケイガン嬢が現れてご迷惑をおかけしましたと謝罪した。

よかった。

1ヶ月休みをあげるから仕事場に来なくていいと言うと、どうか働

かせてくれという。

外にも内にも飛び回っているのです、事務所内で連絡の受発信をしてもらえると確かに助かるのだが・・・

「家に帰って養生したら？」

「えっ」

そもそもケイガン嬢はハリーの知り合いのフェルナー・ケイガンの娘で工場創設の際に大変世話になった恩人の娘である。

事務関係をやってもらってはいるがそもそも従業員ではない。

強いて言えばオーナーのお嬢様というところか。

工場爆発からすぐにフェルナーがすっ飛んできて娘の状態が尋常ではない事を知り自宅に戻そうとした・・・が、ここから連れ出す事が出来ず、結局工場内に医者と女中つきで軟禁していたのだ。

まともになつたのなら今のうちに実家に帰ってもらう方が気持ち的には楽である。

「ここに居たらお邪魔ですか？」

「正直、また再発したらちよつと困るかな・・・」

「気まずい・・・非常に気まずいと言わない訳にもいくまい。」

「・・・わかりました。帰らせていただきます。」

ケイガン嬢もその方が楽だろう・・・

ん？

な、何故？

何故そこで泣くんだ??

あんな発狂した姿を見た野郎共（約2名）の近くに居るより家に帰ってぬくぬく暮らしている方があなたにとってもいいんじゃないのか？お嬢さん??

ハリーが複雑な気分していると、そこにバスコーが入ってきた。

「！」
社長室の机に両手を当てて突っ立ったままケイガン嬢を凝視するハリとその前で泣くケイガン嬢の光景を呆然と見ている。
背後のバスコーに気付きケイガン嬢は泣き顔のまま一礼してすばやく事務所を出て行った。

「どうしたんだ？」

「正気に戻ったらしい。実家に帰ってもらうことにした。」

「・・・ここに居てもらおう訳にいかないか？」

「え？何故？」

「いろいろ知りたいんだ・・・彼女にはエルが関係しているし。」
その言葉にさすがのハリも真顔になった。

「・・・俺、忙しいからとてもじゃないけど今はエルの事なんて考えられない。バスコー。お前もこの、この会社の副社長なんだぞ？」

そう言つてバスコーの右腕を掴まえると、もう片方の手でようやく正気に戻ったらしいバスコーの頬をピシピシと叩いた。

「どうやらお前もまともになったようだから、俺の代行としてキッチリ働いてもらうぜ。覚悟しておけよ！」

結局その1カ月後、ハリとバスコーは工場閉鎖を決断し各方面に調整を行った。

もうこの先コミュ エルが生産される事はないというニュースは瞬く間に世界中に広まり在庫はあつという間に無くなった。

あとは工場内の部品組み立て分だけ発送して完全撤収という段になった時に、今度は強盗・・・しかも武装集団が20人程徒党を組んで強襲してきた。

夜襲だったため人に被害は無かったが、在庫部品や金型が盗まれラ

インは全て破壊された。

ハイエナか!!

部品だけ作って組み立てれば出来上がると思っている馬鹿共が!!
罵りの声が朝もやにつつまれた工場にこだまする。

機材売却先に事の次第を報告し、スクラップ屋に爆破された鉄の破片を二束三文で売り払うとそこには何も無いがらんどこの空き工場だけが残った。

発売から2年目にしてコミュ エルは市場から消えた。

第二十七章

冬が終わり春が来た。

冷たい風が和らぎ日差しに強さを感じて人は季節の変わり目を知る。それは太陽と空と大地が確実に生きていることを確信させ、約束どおりのそしてその普通の季節の移り変わりという幸せな回転に誰もが漠然とした希望を見いだしていた。

キリークの宮殿の中もまた変わった。

エル爆発から枯れ果て荒れたままの中庭に今年は緑が芽吹いた。地下の研究者達の中に植物再生研究会というサークルがあるのだが、枯れ木から、大地からその新芽を見つけ『いろいろ試した成果が今年はようやく実った!』と喜びあっている。

そしてその新緑と同じ色の瞳が2つ。

謁見の間にかけて崩れた石の玉座があった場所には真新しい白い玉座がすえられていた。ガラスと鉄の合成金属が美しくなめらかな曲線を作り少年の身体を支えている。

以前は開くことは無かったその瞳は春の日差しに満ちた室内を眺めキラキラと輝いている。

傍らにいる老人が語りかけた。

「ナーノ様。寒くはありませんか?」

「僕は大丈夫。少し温かくしよつか?」

「いえ、申し訳ありません、つい・・・私に合わせると皆が暑がりますのでこのままです。」

「うん。今日は天気がいいな。外はどうだったの?」

「少々風が冷とうございました。」

「そう・・・」

「もう少しお待ちいただければこの窓ぎわまで行けます。夏には中

庭の花も満開になるでしょう。」

ナーノの改造が進み、有線でないでいたものが今は無線配信によるコードレスに変わっている。ただ謁見の間、しかも玉座より半径3m以内が行動範囲でしかない。

そこから離れると“ユリカゴ2”のシステムからの相互認識からはずれ精霊達の動きが乱れるのでやはり殆どの時間をナーノは玉座に座って過ごしていた。

そもそも最初にナーノを玉座に座らせたのが間違いのもとで床に寝せておけばその後の作業は楽だったものの、研究員の一人が冗談で座らせ周りの同僚もその調和の妙に感心し配線などを玉座を中心に敷設したのである。

そして、玉座が変わり行動範囲が広がってもナーノは玉座に座っている。

その表情はソフィアが居た頃のナーノにほとんど近い。だが実のところ彼の身体は石のままだった。

炭素合成素材という一見人肌かと思わせるなめらかな曲線と柔軟さ。自然と人工の差が縮まる。

その目に映る謁見の間も瞳孔から脳に届いたものなのか、実は地下の装置を経由しているのか・・・ナーノ自身も判らない。知っているのはそれを担当している研究員だけだろう。

成長しない永遠の少年を哀れとも思わぬ老人は今あるテクノロジーの最高峰を彼につき込み続けそれを寵愛し礼賛している。

「グッ!!!」

「!!!」

月日が流れ芽吹いたのは草木だけではないようで、今こぶしをフルフル震わせて仁王立ちなのはフェルナー・ケイガン。そして床にうずくまっているのはバスコーである。

その横で恐縮しているのはハリーで、すでに往復ビンタをされて頬が腫れている。

「どうしてくれるんだ！おまえらは・・・もう信用できん！」

フェルナーの後ろにはケイガン嬢が涙目で立っている。

「おとうさ」

「黙ってる！」

娘が子供を身ごもった。

本人も知らなかった。

しかもどうやら父親らしき男も知らなかったという。

そんな馬鹿なことがあるか！

娘がちよつとおかしくなつた時期を考えればこいつらしいかわけだが、自分かもしれないなどとあやふやな答えを聞かされた父親は激昂した。

正直に言えば問題が解決するというのは嘘である。

殴られて意識が飛んだところでバスコーもしまったと思った。

ケイガン嬢の妊娠を知ったときに何となく思い当たる夜が頭をよぎり彼女と一緒にいる覚悟と自信とを持ってケイガン家に乗り込んだが、つい知らない事を知らないと言ってしまったこのザマである。覚悟が足りなかったとしか言いようがない。

その日一日中、ケイガン家から怒鳴り声が途切れることは無かった。

「ハリーすまない。」

「いいよ。もう・・・驚いたけどね・・・よく10も年下の子を抱いたもんだな。」

「・・・」

「エルが仲介人なの？これって。」

無言でうなづくバスコー。

「じゃあ、おめでとう！バスコー

全精霊の祝福を受けし婚姻に

幸いあれ！」

「なんちゅう皮肉だ・・・」

げっそり顔のバスコーに満面笑みのハリー。

コミュニエルのおかげで成金状態の兩人は今それぞれ事業を立ち上げ社長となっている。

生活に困らせる事はないだろうとは思うが、バスコーの身分が民人だという事でケイガンが渋い顔をした。

ケイガン家は大貴族に仕える侍従　　身分は民人だが世間的には

準貴族だ。

『俺、キリーク王家に知り合いがいたんですけど・・・』

こう正直に言えば問題がもつとこじれるのは間違いない。

もつとも、バスコーの家は初代ヴァーウエン王までさかのぼると立派な貴族でありケイガンが後にその事を知ってから身分差に苦言を呈するような事はなくなった。

第二十八章

春も盛りの花ざかり。

だが、ここに来て天候不順が続いた。

急な大雪が街に降り、突然25度を越える日が続いた。

やはり、まだ天候はおかしいのか・・・

市井の人々はあきらめ顔で日々を送る。

その頃宮殿は慌しい事となっていた。

10日後にアルシュ王国の冷血王フェルーンがやってくるといふ。

宮殿内でのエネルギーシステム完成の報を受け、まず表立って行動してきたのはアルシュ王国だった。フェルーン王はそもそもソフィアを送り出したあたりからキリーク攻略を色々と画策していたらしい。

ユリカゴ爆発後その計画も一旦白紙状態になったが、昨今の宮殿の情報を知りついでに早く研究員達に警備の申し出をしたのだった。

キリークは王惨死、継承者なし（公式）で王家は潰え、城を警護していた近衛兵は全員死亡。宮廷内の貴族は各領地に散らばり政治体制は地方貴族の自治運営へと移行していた。

そこにアルシュは用心深く接触していくつかの地方を懐柔し、それをちらつかせつつ警護を申し出たのだ。

アルシュの使者に研究員は日和った。

宮殿に明かりが常時灯るようになって数カ月後民間の警備員（実はアルシュ公安局員）がキリークの宮殿に常駐するようになった。

そして、キリークの首都ルーパーパスが静かにアルシュの手の内に落ちて数ヶ月。

キリーク攻略のお膳立てが出来たことを確信したフェルーンは宮殿に乗り込むことにした。

コムニエル工場が爆発したあの日に会うはずだったリック・ニイバーからその情報をもらいハリーは思案した。

くそ真面目なあいつが情報を流してくるといふ事は、よっぽど腹に据えかねる何かが起きているに違いない。

情報自体はたった1行“ 日 冷血宮殿に来る”。

キリークは王家が（公式には）絶えているから何をしに入ってくるかは明白だ。

隣国のとんでも話はエズブラン卿からチヨロツと聞いているが、あの国は軍人がすっかりしているからまだ民は救われる。

こちらの技術者が果たして隣国の軍人並みに愛国心と義憤に満ちているかというと・・・

ハリーはある決意をもって車にフル充電をした。

「チツ・・・今回は毒見がないや。」

川原で名もない雑草といやに色が鮮やかな魚の煮込みを食べるハリ

！。

もう夕暮れて今日はここでピークだ。

正直、コザガラやまして精霊王に会える気はしない。

判っているのだ。自分にはそういうものに会う体質はない。

バスコーがコザガラに気に入られている事も、摩訶不思議な奥さんとの馴れ初めも（最初なのに記憶がスッポリぬけてざまーみるだ！）

そして、彼の5代前が実はエル捕縛に関わっている事も知っている。これはただ確認に行くだけの登山なんだろうな・・・自分にその手の縁がないと証明する為、そして出来るだけの事はしたという自己満足の為に・・・

食べ終わり川の水で飯盒をガシガシ乱暴に洗っていると、取っ手が

カコツという音と共に外れた。

「！」

小さなパーツでも無いと困る！

慌ててハリーが川の中を追いかけて行くが春の川は流れが速く、しばらく追いかけて足もしびれ息も上がりついに歩を止め川の行く先をただみつめていた。

川の両側から木がこずえを伸ばし、夜の暗さがさらにその影を闇と塗り染める。

気がつけば自分の立っている場所もやはり陰の中で川の音だけが激しくバシバシヤと耳につき引き返そうと思いつつ後ろを振り向けばやはり黒い川がこちらに向かい流れてくるばかりだ。

なんでこんな所に来ているんだ？

再び川下に目をやると・・・

・・・向こうから誰かがやってくる。

鬱蒼とした森の影から人らしきものがこちらにむかってパシヤリ・・・

・パシヤリ・・・と川の流に逆らいやってくる・・・

「コザガラ様・・・？」

つぶやけば、反応はない。

なんだろう・・・幽鬼の類じゃないだろうか。

いや、山の獣かもしれない。

恐怖の方が先に立つ。

隠れなきゃ・・・どこ？

どこにも身を隠すところなんてないよ・・・ハリーはこの状況に不思議と笑ってしまった。

考えてみたら冷血野郎に国を乗っ取られる恐怖からここに来たのだ。いつでも希望に引き付けられて進むより、恐怖に背を押されて動いているんだよなあ・・・俺って。

ただ何がこちらに来るのか

それだけを見てみよう

ここにいれば何かが来る

空にかかる群雲がゆるりと流れ新月の弱い薄光が岐を照らす。

ハリーはそこに現にはありえぬ人を見た。

『あ・・・』

声にならない畏怖の念が足をすくませた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4682x/>

精霊王転変

2011年11月4日23時41分発行